る)珈琲店に、書生を見ること多し、而も是等は較、高直なる故、我待合通ひの如く少〻金廻りよき氣取り屋ならでは數、し難し。多くは伯林の芳原新宿洲崎等に行く、而してその我二廓四宿よりも、罪惡を行ふに甚た便利なる所以は、別に定まれる一廓を成さずして、繁華なる街道皆これなるを以て、特に不清淨地に入るの危險、朋友師父より彈劾を受くるの危險を冒すことなくして獸慾を充たすを得るに在り。伯林の諺に、夜十時を過ぎては、清淨なる婦人も、蕩兒に無作法の擧動に及ばれたる時、怒るの權利なし、といふ程なり。幾萬の白首は、東京ならば銀座、日本橋通より眼鏡、神田明神前高等師範、大學高等學校前、錦町、神樂坂、三田、芝上野九段公園、小川町、烏森等、書生兵士、ついでは番頭多きあたりを網張りて待居る、あちらこちらを散歩する者、素人も黑人も混し居るが故に、不知不識一時の出來心より墮落の端緒を開くもの、其幾許なるを知らず。書生連は、初めこれらに手をつけ、二馬乃至五馬を費す、是れ我遊廓通ひ時代なり。其矢場通ひの時代には、則ち小間物店等の賣子を挑むなり、是等皆半白半黑なるが故に、大方は二つ返事なり、斯の如くして書生は、墮落せぬまでにも、勉强を遺失するもの百中九十五なり。

固より未來のビスマルク、ワクチル、スタイン、ホオヘンルウヘ等は、此百中五の中の萬人の一人として出つるなり。是等は皆毅然として守る所ある人、俗流に抗する人にして、二十一大學幾萬の學生中、五指を屈するにも足らざるは論なし。先づ概して獨逸の書生氣質の、取るに足らざるは右の如し。即ち學生の職分に忠實ならず、操行に於いて亦稱するに足る者なきものなり。

右は、吾か從來歐州の學生の氣風如何の問に對して、答へ來れる要旨なり。然れども翻りて思ふに、獨逸の勤勉なる學生も墮落書生も、一人の

除外なく有する所にして、而も我國の頗る多數の書生に全く欠けたる長所特質唯一あり、他なし獨逸の書生は決して夢にも他國書生の長所如何なるを問ひ之に模して進德を計らむなどの情なき卑屈なる氣風なく、自國の傑物ビスマルク、ギエテ、モルトケの少時如何を鑒み、獨逸氣質、獨逸魂を發揮して以て宇内の指導たらむと擬するの意氣山の如き事これなり。

○白死病

我本國にては、頃者黑死病、黃死病、心的ペスト等の流行ある由、日本新聞に見ゆ。吾亦西航以來、白死病の社會病理學的研究を試み漸く左の如き點まで進むを得たり。

症候――患者の皮膚漸次白色に變し、頭髮より香臭を放ち、音聲金切聲となり、往々自國語を忘れ、動悸抗進し、下腹に力なく、吹かば飛ひ相な

り、囈語甚だ多く、一として自國を罵詈せぬはなし。

原因――此病は一種の傳染病にして、感染の素因は、一知半解に坐すること多く、半開人が歐米人に接する時に感染す。基督教、文學、哲學、美術等に身を役して、歐米の傑物のみに接する、正直にして迂闊なる半開人、政治外交軍事の衝に立ち、充分の力量なくしてへこみ勝なる臆病未錬の半開人等は、尤も此病に罹りやすしとす。

細菌學的研究――此病の黴菌はバチルス、バンアリアヌスと稱する者にして、自然に歐米アリアン人種の體中に生し、異人種に向うては猛毒あれども、歐米人自躰には却りて其氣力活動の原因となること恰も胃液の作用に似たる者にて、獨逸學生の意氣も、全く此菌を多量に有するに因る事なり。此菌は或は油畫に附着して、觀者の眼窩より感染し、或は音樂の波動に連れて聽者の耳朶より入り、或は國土山川の所在に存

して、皮膚より感染す。就中教會堂、寺院、劇場は、尤も此菌に富む。されど尤も頻繁にして激烈なるは、婦女より感染する者是なり。

經過――右婦女より感染する者は、主として皮膚よりす、握手は容易に感染の媒介を成す、次に一層猛烈なるは口吻よりする感染なり。此時より患者の囈語頻なり。更に劇烈なるは下腹部よりの感染にして、忽にして患者の下腹部の力全く拔け、ヒョロ〳〵然として虛脫に陷る。此時患者の嗅覺味覺は著しき變化を受く。乾酪を好むこと甚たしく、腋臭を酷愛し、遂に排泄物を好むに至る、乃ち全く色情狂に類す、亦歐米人の嗜好に接近せるなり、然れども、病毒は猶主として皮相に止まり、皮膚病の一種に過ぎず、其內攻するに及ひて腦脊髓を衝き、致死の原因となる。白死病菌內攻の最大誘因は舞踏是なり。抑〻舞踏は、通例男女相擁し、胸と胸、あごとあご、下腹と下腹、不接不離の關係に在り、互に相振り廻し、感應電氣を起して、以て無上の愉快を感ずる者にして、歐米の青年男女が、寢食を忘るゝに至る者なるが、既に虛脫せる患者は、女に振り廻はさるゝこと、鼠の猫に振り廻はさるゝが如く、自らは女を振り廻はすこと能はず、是に於いて患者は一種の惡寒を感す。(但し患者は之を愉快とす、)此時は患者の腦脊髓が大振蘆を起せる時にして、病毒乃ち內攻せる者なり一たひ內攻せば、遂に救ふべからず。

治療――治療は未た完全なる研究を遂くるを得ず、甚困難なり。但目下獨逸の菌佛蘭西の菌、(ゆく〳〵は英米の菌をも用ゐる積)より分析術合成術を用ゐて血清液を作り、血清療法によりて免疫に至るを得むとの希望あり。百年前獨逸にて、佛死病流行の際時の國手路易西女王ギヨエテ、キヨルチル等の療法、我國にて千年前及二三百年前漢死病の流行せし折、國手菅原道眞、山崎闇齋、降りて賴山陽等の藥方も皆此原理に基つ

けり。但し白死病は、佛死病、漢死病等に比すれは數層激烈なるを以て、療法は猶幾多の研究を要する者と信ず。

患者の病床日誌は整備し、其醫語の標本も頗る蒐集しあれど、醫士の德義上、斯學研究の篤志者に非されば一覽を辭せざるを得ず。患者伊藤某が健康者某を評して「某は西洋へ行つたら舞踏の一曲も覺えて來るかと思つたら、依然たる頑固漢なるには困る」といへるは、新聞より得たる一材料にて、此醫語は恰も右舞踏と白死病との關係の一端を洩すものなり。尙此研究結了せば、吾之を提出して以て異學のはくし學位を要求せむ積りなり。

○修學方針

佛に於ける吾が修學方針は、獨に於けると同しく三期に區分す。讀書述作期、實地見分期、旅行期これなり。今は第一期に在り。佛の實地について話の種あらむは、一年の後に在るべし。秋よりは第三期に入りたき希望なり。高等學校等、入學期の接近せる諸君は、如何なる方針を立てゝ中原逐鹿の准備を營まるゝか。

（下）

○獨逸人の書牘

「畏敬する學士足下、

足下が猶善く茅屋を忘れ玉はぬ御言葉に接して、荆妻幷小生は欣喜の至に候。クリスマスの日、御惠贈の美敷日本書をグロオト家より差遣候處、其內容は七重に封せられ候、と申は此ドブランにて唯の一人も日本文を讀み且譯し候者なき故に候。今朝は又御名刺頂戴致候。こは御年始被下候義と存し、私共（妻と自分）も茲に謹て新年の御慶申納候。乍憚申

上候、儀者此新年の終は、足下には歸國を、貴國には一大學敎授を、贈呈致す事なるべく、於是足下は御宿志を御遂被遊、貴國に於て地位あり名望ある御人物と御成被遊候事と存候。足下は實に日本の爲に新世紀に於ける精神的先鋒に可被爲在と信候。此新世紀に於て各國民は益〻接近し、人道と文明とは其所得を可受候。我歐西の文物を觀得して其學殖を自國に齎さむか爲に、此地に遊はるゝ日本の學者諸君は、實に人道の使徒と稱へ可申、獨り自國人の感謝を受く可き而已ならず、又實に吾人歐人の知遇と尊敬とを博せらるべき儀に御座候。文明史上より觀候へば國家の區別は誠に些々たる者に有之、乃ち吾人歐人が獨人たり佛人たり將た英人たるは、足下の眼にも小生等にも極めて瑣事に可有之候、約言すれば吾人は總て文明人なるが故に候。

現在佛國に御滯留の足下には、佛文にて書翰差上候方宜敷かるべく候へ共、既に獨逸語を解し又獨逸の風俗及主義の尊ぶべきを知らるゝ人士に向うて、獨逸語以外の國語にて書翰を認め候は、小生の堪へ難き所に御座候。（一句佛語にて）御了會でせう、足下。この新年中に私共は今一度拜晤を得度希望に不堪候。私共は茲に重ねて御枉駕を遍に〳〵奉願候。猶荆妻豚兒等よりも重々宜敷入書致候。頓首再拜。」

右は獨逸メクレムブルグシエリイン大公國ドブランのギムナジウムの敎授（史學）クラアナル君の書翰なり。去夏ドブランに遊ひし折グロオト一家と遠足會に招かれ、其翌特に一人招かれ、其翌禮に行きし折、我國に於ける基督敎の消長を談話し、歐西無賴漢の多く來る事、切支丹の害心有りし事、新敎よりも天主敎に消長少き事等を話せるより、再度の來遊、自宅に客（ガストフロエンド）友としての來遊を八月中懇請し來れる人なり。年齒五十許、覇氣滿々たる獨逸紳士の風丰書牘中に躍然たり。我國人の歐人に

應對すると如何の逕庭あるかを注視せよ。

「畏敬する教授足下。

綿密周到にして且有益なる貴書難有拜見致候、曩にグロオト家を經て御笑覽に供候麁品は、唯足下令閨及貴家諸子に對する小生の親情の表彰たらむを祈りしに不過候。

小生歸朝後は、如何にも賢察の如く乏を大學教授に承候筈に相成居候。こは實に小生が我國の爲に又一身の爲に深く悲む所に有之、如此尊き稱號が、滑稽的に陷るの虞なくして小生等後進學者に下され得へきは、正に數十年の後に可有之儀に、御座候。唯近時世界文明の潮勢は、益〻人道に率由して人道の開展を促す者有之、而も是れ恰も我國古來の教學の眞髓にして、亦小生專攻の學科の根抵に候へば、乍不及、斯道の爲に犬馬を竭候積に候。

唯一事御言葉を訂正仕度者、小生の歸朝は維廉第二世皇帝陛下勅定の第二十世紀の劈頭(今年の事)に在らずして、實に(此句佛語)佛人の所謂第二十世紀の劈頭に有之候儀に御座候。即ち御考より猶一年永く此歐洲に在遊致候へば、或は再び歐洲に於ける小生の故國(獨逸)に歸り、彼牧歌の風趣あるドブランの里に遊ひ、今一度拜芝を得候プロバビリティは多少無之にしもあらず候。

茲に風樹蕭條たる巴里西郊、古離宮の所在地(離宮は一八七一年獨逸軍破壞す)にさびしき新年を迎へて、遙に高堂の御清祥を祝候。不一。」

右は不取敢吾が贈れる返翰なり。草稿も立てぬ打つけ書なれど、眼目は遠はず、又意味の達する樣書きたる積なり。我國人が歐人に應對する通常の例と同しきや異なりやは、諸君の判斷に任せむ。

「懸しき君よ。

其後は御健に被爲渡候儀と存候。當方も無事に候。此程エルゼ(下婢の名)が新聞を讀聞かせ候樣「建部學士と其同伴者とは無事に巴里に着せられたり。」と聞き候私共は打喜候處、エルゼは冗談の圖に當り候事とて打笑申候。今日御隣のシルリング家は引越を致候。君には御想出に候はむ。テオドル兒は家へ參り候。其宅より何程呼ばれても戻り行かず、私共は一處に面白く遊申候。テオドルは私の夫とあり、エルンストはゲルトルウドの夫となり、(此手紙の作者とゲルトルウド、エルンスト皆兄弟なり)人形を兒供といたして遊候。扨此二對の夫婦にて御互に訪問をいたし候。シルリングの叔母さん(東京語と同し)より葡萄を贈られ候。私共は亦引越の手傳致候。御仕舞に馬車を一輛やとひ、ロハにて宅まで乘參り候。此馬車にてシルリング家は引越申候。福原さん(吾が後住としてグロオト家に宿す)よりも宜敷と申出られ候。又父、母、ゲルトルウド、エルンストよりも宜しく。

親愛なる好をもて、君のヘエドキヒ、グロオトより。」

諸君は定めて作者の何ものなるか、何才の女子なるかに五里夢中の感あらるべし。或はませたる筆つかひあり、恰も切通邊の矢場女に似たり、或は無邪氣極まる箇條あり、七八才の少女と見做されむ。歐西の習俗これにも知らるべしと思ひて諸君の一粲に供せり。右は即ち伯林の舊寓ドクトル、グロオト(ギムナジウムの教諭)君の長女、當時十歳なるが、吾が佛國に着後間もなく贈れる書翰なり。右のませたる筆つかひは、皆此國の挨拶振にて、全く無意義なり、男女握手すとも、深き意義なきと一般なり。されど挨拶振が斯くしつこきは、此國の風俗をも推測られつべし「おつるなみだに墨すりながし云々」が普通の挨拶なるは、色里ならではなき事なり。ロハにて云々の文字、興味むり。其他文學、教育、等種々の方面

に興味あるべし、そは見む人の心〻に。

○ガムベッタの舊宅

散雲里を西北に距ること十町餘、散雲公園の森を過ぎ行けば、山峽に點在する人家を見る、これ即ちダヴレイ村にして、實にガムベッタの舊宅の爲に世に知るき所なり。

ガムベッタ小路を辿り行けば、山と山との間なる、卑濕なる面持する處に出つ。矮少なる三階造の家、これぞ偉人の舊廬とは聞えし。

門鈴を鳴らして音なへば、山妻出で來りて案内す。猫額大の手入せぬ庭あり、闥をひらきて入る、寄付といふべき所即ち食堂にて、廣さは八疊許、天井低くして我等の頭もつかへむ樣なり。食堂の右に十二疊許の坐敷あり。食堂の後手より楷子を登れば、前面に細長き寢室あり、四疊半を二つ續けたる形にて、やゝ側よりたる處に素朴なる寢臺あり、これぞ偉人臨終の牀なりける。其傍には常に用ゐし文机、調度の類を置き、壁間には臨終の際の畫像、死後の石膏像等を掲く。室内を賑はすものは、數多き造り花の諸方より供へたるこれなり、中に尤も目立つはアルサス、ロオレン二州より贈れるものなりけり。案内の婦語らく、これら皆年々新に供へらるゝ、われら此君の在そがりし時より給仕として事へまつり、親しく臨終にも逢ひまつりしが、君の歿後アルサスロオレン二州人士、金を醵して此邸宅を購ひ、そを佛蘭西共和國に献納せり。以來われらは番人として、昔の如くこの三階に住み居るなりと。寢室の左がもとの書齋なりといへど、今は唯その墓碑の寫を飾り、こゝにも香華の充ちみてるを見るのみ。

案内の婦は、今は七人の小兒もてりなどいふ。佛蘭西の家族としては珍らしと稱ふれば、やがて徵兵に行くべきもあり、腕白もありなど謙下

る、多勢の子をよく育つるは、即ち愛國のわざなりといへば、貴下は貴下のパトリオイに竭さるべきならずやといふなり。アルサスロオレンも今は普魯西の暴虐の下に屈めりなど物語りて、さていふ、佛國は美き國と思さずや。

屋の北側にガムベッタの石像あり、これも二州人の建立にて、周圍の石垣の柱に、左はストラスブウル、右はメッツ、さて中間には二州の大都市を刻み記せり。

ガムベッタは一八三八年四月三日に生れ、二十二歳、巴里に辯護士となり、一八七〇年九月四日普軍セダンを陷れ、那玻崙三世帝冕を失ひ、佛國無政府の有樣に陷るや、氏時に年三十三、佛蘭西祖國の支持を絶叫し、共和の假政府を建てゝ其内務卿となり、十月八日輕氣球に乘り、巴里城の重圍を脱してトゥウルに赴き、更に陸軍大藏兩卿を兼ね、危急存亡の秋に際して、堅忍剛毅の精神氣力を以て祖國の將來の爲に謀慮を竭しゝは、敵たる獨逸人の今猶嘆美する所なり。爾來議院に立ち、憲法を制定し、議長となり、内閣を組織し、一八八二年大晦日(明治十五年)歿す。時に年四十五。此家は一八七二年以來の住宅なりといふ。

那玻崙一世の猛威、中歐を震撼するや、普魯西王后路易西ありて獨逸興隆の豫言者となり、佛軍頻に敗れて國都重圍の裏に陷るや天ガムベッタを生して佛國恢復の豫言者を降すチルシットの條約、巴里の風船之を想へば中宵衾を蹴て起つに足る。今來りて偉人の舊廬を訪へば、矮屋陋巷、環堵蕭然、之を彼の戰に一捷して和に百敗し、靦然阿矯と金屋と俗衆に誇示する者に比せば、得失果して如何ぞや。

(一月廿一日日曜記)

一月十九日は、一八七一年の戰爭中、此散雲里(サンクルウ)のモントルトゥウ丘の大戰爭の紀念日とて、その忠戰碑前に祭あり。今日は日曜とて、勞

働者など多くつゞひてまた祭あり、演說あり、喝采あり、樂隊あり、二時餘にして散す。此日雨色濃々、蓋し彼戰役後、此當日の天色、年々然らざるはなしと云ふ。

獨逸の學生

（其中學生に寄す）

未だ拜眉を得ざる身を以て、萬里御書面を賜はり候段、感佩之至に奉存候。時下益御壯榮御勤勉、珍重の至りに奉存候。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

歐州に於ける青年學生の風尙如何との御尋、御尤と拜承仕候。而るに小生佛國轉學以來茲に五ヶ月、今猶孜々讀書攻學の時期に在り、これを了へて後に見物に取掛る都合にて候へば、佛に關する分は未だ申上候時機に不達候。凡そ此種の問は、從來學生學士陸軍敎官等の知人より、屢、得て答候事に有之、今左に其大要を記し候。

先づ獨逸の學制にては、中學といふべきもの約三種あり、第一はギムナジウム、にて其特色は羅甸希臘を飽迄教へ込むに在り、第二は實科ギムナジウムにて、第一よりも較〻羅甸を減じ、希臘を全廢して、英佛即ち近世語學を多くせる者、第三はオオバルレアルシュウレ(上等實科學校)にて、更に羅甸をも全廢し、自然科學及其應用を多く課する者なり、此他またレフォオルムシュウレ(改正學校)といふあり、右三者の粹を抜きて新に學則を立てむと擬し、伯林にて二箇所新に建てられたれど、未た全學級を具備するに至らず、全く試驗中の者に候、右三種の中學は、いづれも修業九年とし、滿九歳に始まりて滿十八歳に了る、大概滿三年のフォルシュウレ(前脩學校)ありて附屬す、即ち滿六歳より之に入るを得る者とす、其他又レアルシュウレ(實科學校)及前ギムナジウムあれど甲は上等實科學校の上方三年を、乙はギムナジウムの上方二年を切り捨てたる者故、別に

擧ぐるを要せず、扨右の三種の中學の稽古を了れば、府縣學務官及補官、並に中學教師より成立せる試驗委員によりて、國の試驗を受く、之にの資格を得、其他文武諸〻の位地を得るの資格を得、大學に入學するには、ギムナジウム出身者尤も好都合にて、即ち神、法、醫、理(政治、經濟、文學、理學、一切を含む)の四分科大學は何れにも入るべく、他の二種は多少の制限を以て入り得ることなれども、ギムシジウム出身者は自然科學及其應用に於て、動もすれば學力不足の恐あり、扨是等各種の高等專門學校に入る者はそれ〳〵規定の試驗、多くは國の試驗を以て成業す、就中大學のみは、自ら學生を試驗して學位を授與するの特權を有す、大學々生は、三年(醫科は四年)の聽講(獨逸大學の中諸所にて聽講の分を總計して)以て、候補生となる、候補生はドグトル試驗を要求し得る者なり、通例候

補生となりてより一年乃至數年にしてドクトルとなり、或は遂に全くなり得ず若くはならぬ者も多し。大學を修業して、ドクトルとはならず、直に文官高等試驗(判檢事も同一試驗にて採用せらる)、教員檢定試驗等を受くる者も尠からず。先づ以上を以て獨逸中學生の成り行きの大要と致候。

扨右の三種中學の中、ギムナジウムを以て尤も上品なる者と致し、此種の教育を人品教育と名づけて尙び候、他は次第に實用を旨とする方にて、品性にも固より注意するも、ギムナジウム程には完全に行かぬものと信じ居る樣子に候。但し此事は、近時大に議論のある所にて、現に教育倫理法理哲學を以て高名なる伯林大學教授パウルゼンが、去夏五月漢堡にてなせる演說など、非常に世の注意を牽き候、同氏の意見も改正學校の方に傾き、所謂人品的古典的教育は最早今日に適せずといふ徽意を表し候。有名なる生物進化學者ヘッケルの如きは其大著自然創造史の新版に於いて、堂々と本文中に此流の教育を難じて、所謂人品的古典教育にて新學術の光明に眼を開くを禁ぜられたる群盲者流が、大學の神學法學史學哲學醫學等に群がり來るは、是等の學科をして、或は滅亡の匪運より免かれしめ、或は時勢後れの陋態を株守せしむる所以なりと冷罵致居候。先づ獨逸現今の中學教育の理想、及其既に根本に於て動搖を始めつゝあるを看取せば、茲に事足る次第に候。

斯る理想に本づける教育の實現として、第一に目に附き候は、中學生のおとなしく生ひ立ち候事に候。凡そ此國の風は、十四歲までは兒供にて、何人の兒たりとも皆々よりお前と呼ばれ、太郎とか次郎とか呼棄にせられ候。さて滿十四歲を超ゆ、元服の式が濟みて後始めてあなたと呼ばれ、佐藤さん齋藤さんなど呼ばるゝに至り、茲に漸く待遇だけは一人

前と相成候。されば中學にても、二級に進みて、始めて兒供あしらひにせらるゝ事止む次第に候。彼等は極めて丁寧向きに低聲にて話す樣教へられ、誠に小ぢんまりと行儀よく育ち候、大概夜などは一人遊びは勿論、八時の晩餐後は、用ありとも一人にては外出を許されず、寄宿舍といふ者はなきも、各の家庭は斯く注意して監督致候。婦人つきあひなどは無論、出來ず、但し去年六月十八日、伯林のルウイイゼンギムナジウムにて音樂會のありし時、演奏者は皆同校の生徒にして、來客は教師等の親族朋友に限り、而して妙齡の婦人も數多參り候を見受け申候。

彼等の教場にての教授は、殆んど皆鍛錬的に有之、そが豫習復習に少くとも毎日四時間を要し、就中大部分は、困難なる羅甸語及希臘語に頭痛を起し候。概して彼等は我々の如く十二三時間の勉强などはなさず、故に到底羅甸希臘の豫習を充分にすること能はずして、大抵は內教師を傭ひて手傳もらひ候。而して此內教師は、大學々生中の貧乏なる者、若くは或る關係より少々錢の餘分に入用なる連中共が內職として營む恰好の仕事にて、之を家內助教師といひ、新聞の廣告欄には、日として多々需要供給を見ぬは無之候。斯くて此家內助教師を傭ふの資力ある者は學校の成績宜敷、しからぬ者は頗る地獄の沙汰に似て、金次第の氣味合有之候。作文なども隨分人に助けもらひ候、卑屈者も有之候、小生の寓主グロオト君(右のルウイイゼンギムナジウムの教諭)より、其受持の生徒の作文を見せられ候中、「米國の文明と地勢との關係」といふ宿題に、餘り大人びたるがあり候處、これは必定中學教師なる其親父が助けたるなりと、グロオト君の申したること有之候。

斯くして出來上り候ても、實際社會に其必用の乏しく相成候今日の事故、中學卒業後も自在に希臘羅甸にて讀み書きの出來候者は殆んど

無之、而して大多數の時間と精力とを之に費候結果、現時の自然科學などには一向に鹵莽なるが多く、ヘッケルの冷罵も強ち無根には無之候。例之ば、文科大學出身のドクトルにして、ジェヴオンスの論理學にある知識の種類の觀念すらなき者など、珍らしからず、凡て我邦の木の葉漢學者とでも話候、心得でなくては、我々の談論は、徒に對手をいぢめ候結果に立至候などの笑話も數多有之候。唯一般社會や新聞などが進み居り候爲、常識は相應に發達し居りて纔に失態を掩ひ居る連中も多々に有之候。

扨斯の如く、時勢の先驅や、況して改革の先鋒などは思も寄らず、全く時勢に服從する柔順なる子供として育ちたる青年共が、大學又は高等專門學校に入るや、昨日迄とはがらりと變り、全く獨立自由の境遇に入り、寧ろ自放自恣の狀態に立至候。出入にも制限なく、中學時代の大心配なる、今日の下讀の粗草が直ちに明日の得點に影響する事もなく、年百年中試驗の試の字も無之して、唯大學に登校すれば事濟み候。大學には聽講臺帳あり、これによりて三年(六學期)後にドクトル試驗の候補生たるを得るや否やの證據とす、此臺帳には、學期の始めに大學の會計に聽講料を拂ひて後、教授より教場にて聽講始めの親署證明を得、又學期の終には聽講濟の同樣證明を得るを要す。大概父兄の學費を送るに、經常費毎月何程と定め、右の聽講料は右の臺帳により特別會計とするが多し、されば學生等は競うて右臺帳の面を美にし、數多の學課の聽講料を拂へども、右教授親署證明の兩日の外は、欠席するも規則と體裁とには妨なし、小生も聽講致候「ワグヲル」教授の經濟學などは、學期の始めには六百餘人の聽講ありしが、學期の半に至りては漸く百人を數へ得たるに過ぎざりし事に候。

大學生の尤も好み候者は麥酒と歌と組合をなして決鬪する事とに有之候。辻君賣子等も亦甚だ辭せざる所に候。殆ど一切の書生は、何れかの學生組合に屬せざる者無之、平生は此組合の事務所にて擊劍を稽古し、(大方の大學には道場附屬す)、麥酒を飲み、又唱歌を稽古致候。小生フリイドリヒ街の宿所の初階は、恰も一組合の事務所にて、毎週四夜つゝ大抵夜の二時頃迄唱歌の稽古を致し候。今其歌詞にして、尤も彼等に膾炙せる者の一例を擧ぐれば、(意譯なり)

其一

獨逸、獨逸、すべての上に、世界に於ける凡てのものに、
衛りと攻めとに同胞の如く、マアスよりメエメル迄。
エッチよりベルトまで、一致結合するときは
獨逸、獨逸、すべての上に、世界に於ける凡ての上に。

其二

獨逸の婦人、獨逸の誠、獨逸の酒に獨逸の唱歌。
世界にひろく古來汝の、高き譽を傳ふべし。
尊き功績に我等の生涯、永く我等を勵まさむ。
獨逸の婦人、獨逸の誠、獨逸の酒に獨逸の唱歌。

其三

一致に正義又自由、我獨逸國の爲に。
その爲にこそ我等は働け、同胞の如く手にも心も。
一致正義又自由。これぞ幸福の保障なる。
榮ゑよ獨逸の祖國、榮えよ此幸福と輝きて。

先づ此類に有之候。

大學々生の生活は、未だ交際社會には花を咲かせ不申候、我國ならば

歌加留多會には、大學々生及び少尉などが尤も花咲かせ候へ共、此國の舞踏會にては、ドクトル連に少尉連と申す有樣故、大學々生は猶麁衣弊帽の武骨漢を多く見受候。唯彼等の他人殊に婦人に對するや、ギムナジウムにて鍛へ揚げたる猫撫聲は、一寸不相應に聞え候。兎も角も大學々生の生活は、從前の中學生活に比して、餘りに呑氣に餘りに面白可笑きが爲に惰氣に誤らるゝ者も尠からず、漸く候補生と成りても、今年は、今年はと云ひつゝ何時迄もドクトル試驗を受けぬ連中中々多く候。且獨逸中の各大學を周遊するには、一向制限無之候故、甲大學の某教授は試驗が嚴重と聞けば、忽ち去りて乙に行き、丙に行く、行脚的學生も尠からず、法學院を落第して慶應義塾に轉ずると同趣向に候。斯して候補生には三年にて相成候ともドクトルには七年も八年もかゝり候者も稀ならず、濟生學舍の後期開業試驗に手間取る書生によく似通ひ申候。されば伯林大學在學生三千人、而して年々ドクトルとなる者百人に滿たず、即ちドクトル一人を作るに平均三十年の修業を要する比例に相成候、學生の挫折者の多き事以て可見歟と存候。

斯く學生の野良つき候狀態と表裏する一利益は、彼等が社會の事に冷淡ならざる（例令腦天氣より出づとするも）一事に有之候。一例を擧ぐれば、一昨秋より引續き、伯林大學に二回の珍事あり、一はアロンと申す講師が社會民主黨に關係せりとて免職となりし事、一はデルブリュックと申候教授が同しく之に類する言動ありたりとて、位地の危かりし事に候、然るに此二回とも學生は大騷を始め候。學生中にも、獨逸黨、國民黨あり、又社會學々生協會あり、前二者は社會黨に左袒せず、後者は全然之に同情を有し候。斯かる矢先故、其冬の大學新聞縱覽所（小屋の如き小さき室ありて、學生醵金して新聞雜誌の縱覽所とし、役員は學生より撰出

す)の役員選擧の折には、廣告やら、札配りやら、あらゆる手段を竭して、自黨の候補者を推すに力め候、其狀態は兒供らしく又狂氣しみ候へども、世間と近密なる同情を有して動作致し候丈は、大に褒むべき事歟と存候。其折前二黨は同盟し、遂に社會學々生協會の負と相成候。

右記載致候中學及大學々生の氣風は、固より多數について申候次第にて、百中一二の除外は無論有之事に御座候。獨逸二十一大學數萬の學生中、此百中一二の連中が相應の人物となり、就中更に其千中の一二が、ビスマルクたり、モルトケたり、ワグチルたり、ハルトマンたり、ガウスたる者に有之候。即ち這般極少數の青年共は、皆必ず精を勵まし己に克ち、深く思うて禮に復り、卓然として數多の凡庸の外に自ら樹立する所ある者、蘊蓄涵養數十年にして乃ち偉大の域に入る者と存候。蓋し天下の青年、如何にせば偉大なる人物となり得るかの方法は、年十五六にして、皆、夙に之を知る、之を知るに於いて、皆相異あるなきも、唯克く之を行ふと否とによりて、乃ち三十年後の造詣に霄壤の差隔を來す者と存候。我明治の俊秀なる青年も、獨逸の俊秀なる青年も、行ふ所は期せずして相同じく、乃至獨逸大多數の凡庸書生の行迹志操は、亦全然我凡庸書生の行迹志操と同科なる次第に御座候。我輩は道を獨逸の青年等に問ふを要せず、今は唯發憤自彊を要事とする儀歟と信申候。

終に臨みて茲に附加ふべき一儀は、獨逸書生(想ふに歐米各國の青年)の一大特質として、自家立志の矜式を他國青年に求むる樣の儀は斷じて無之、自國を以て世界文明最優等の天職ある者と確信し、必ず自國古今の傑物に尙友して、以て其造詣の上達を計り、其涵養の淵深を求め候儀は、右の沼々たる凡庸者流にも、百中の一二にも、又千中の一二にも、一人の取除なく普通なる性格たる一事を擧げざる可からざる儀に有之、

候、「獨逸、獨逸、凡ての上に、世界に、於ける、凡ての上に」は、「獨逸の婦人、獨逸の、誠、獨逸の酒に、獨逸の唱歌」と、表裏を相成して、以て實に獨逸學生等の最大最高なる福音を形つくり候事に有之候。國を負うて世界に覇たらむと、擬する稜々たる覊氣を描撫聲の奥に藏するは、天を衝くの逆髯をひねりつゝ、殊勝らしくバレスチナ旅行を企てたる維廉二世の治下に在る、獨逸青年學生尋常の性格と見認申候。

感情的に（分別の上よりするは別問題）他國を美とし自國を醜とするは、半開人の特徴の一にして、同じく感情的に自國を美とし自然に他國を劣れりとするは文明人の特徴なりとは、近世哲人社會學者の定論に有之候。獨逸は此百年來、幸にヘエゲル、ギョエテ、ヘルデル、クロップストック、ルウイイゼ皇后、維廉大帝、ビスマルク、モルトケ、ワグネル等の學者詩人語學者音樂家軍人政治家を有し候御蔭を以て、半開より文明に入るの大進歩を成し了し候。彼等青年學生等は、夢にも是等の諸豪の名を忘れては相成らぬ次第、敢て己が功として誇りては相濟まぬ次第に御座候。

先は右御答迄書綴り候、御判讀可被下候、當地の天氣は春來兎角不順、但し暖氣に候、今日は此書認め初め候頃より空晴れ渡り申候、梅なき里は、唯日色のやゝうららかになり增り候より春を覺ゑ候次第に御座候。時下益御自重御勵精を祈候。不一。

庚子三月一日於佛國巴里西郊サンクルウ郵舍　水城生

髯上霜、頌大國之英主也

天を衝く、維廉二世の、髯の上に、

霜や〻置きて、年暮れにけり。

散雲漫草

○散雲邨舍

巴里に入るの日、及その翌、遍く僑居を市の學生街(カルチエ、ラタン)及紳士街(エトワアル附近)に求むること盡日、得る所或は醜陋、或は不廉、皆合はず、十月三日、出でて西郊サンクルウに遊び、竟に一居を得たり。居は舊離宮の大手通りに在り、那玻崙三世の世盛りには、此家實に其劇場なりしを、近時修繕して住家と爲し、二老寡婦母子之を支配して、以て夏時都門避暑の客を待てるなり。時正に秋節、客去り院空しく、吾が需に應して恰も可、乃ち其第三階の二室を割きて之を儲る。當日の劇場、大國帝王

の玉座、今や此階住居の婢室たり、變遷多き國情とはいへ、抑〻亦滄桑の感に足れり。

サンクルウは巴里の城壘を距ること西南半里、蜿蜒として巴城の內外に蟠流する清音（セイヌ）の流れに枕みて、丘巒十丈、邑は其中腹より岡上に布置し、一條の石橋を隔てゝ巴城外市のブウロオニュに對す。丘林蓊鬱、すべてこれ古宮苑、宮は一八七一年普佛戰亂の兵燹に罹りて、今は一部の殘闕纔に初等敎育高等師範學校として存するのみ、百頃の舊樹林、參差たる噴水、園池、花苑を併せて、サンクルウ公園を成し、都人の車馬を驅る者、日曜毎に絡繹たるも、平日は則ち寥々落々、秋氣の肅清、秋風の蕭颯、之を享けて餘あり。試に園中トロカデロが岡に上れば、巴里幾萬の市街、茫々として烟靄の裏に沒す、其間唯モンマルトルの岡上に巍然たるサクレクウル聖心寺、エッフェル千尺の高塔、那玻崙の英魄を藏むるアンヴリイド

院、サンシュルピイス寺觀、パンテオン招魂社等、或は雲霧を衣裳とし、或は蒼穹を凌ぎて、遙に相招くを見るのみ。右方蜿亘の岡巒、逶迤として拖いてわが此丘林に及ぶ、頗る我舊都西山の勢に似たり。眼下碧水一帶時に木葉の泛々を訝る、即ち巴里往還の小滊船清音河を上下する者園に常住八人の園丁あり、常に草花を培養し、季に隨うて之を園中に移植し、以てその景致を添ふ。

邑はクロヴィス王の孫クロドワルドの庵を結びしに創まる、實に今を距ること一千二百年、サンクルウの名亦これに因めり、今の寺觀は此庵の發達せるなり。此地人口僅に五千、セイヌ、エ、オワアズ州に屬するも、事實巴里の近郊たり、兩地の連絡、鋏路による者三條、市街鉄道による者二條、滊船による者一條、近きは二十分、遠きも一時間にして巴城の要衝に達す。事業を首都に營むもの、亦往々此地に住して日々往復す、滊車は寫

眞入りの定期豫約切符を發行して以て此類の行客に便す。地勢至便にして、而も閑靜、尤も讀書講學の人に適す。大都盡日の馳騁觀察より歸來して、江邨の晩風一陣の清を掬する、生氣頻に加はり、更に明日の經營に向ふ。

散雲はサンクルッを雜譯せる者、以て吾寓の邨舍に名つく。居ること一月、木葉悉く脫ち、秋意蕭條、三層樓下、枯木を隔てゝ清音の寒潭を瞰す可し。而も比日大概天色清澄、風暖に氣霽る、宛も我所謂小春の候に似たり。巴里と伯林と、氣候の相異なる、地理書實に吾を欺かず。散雲邨舍の勝、試に之を擧けむか、清音河畔の明月一なり、古宮苑の秋草二なり、園林の秋風三なり、街樹の落木四なり、散雲橋下の流水五なり、九月四日河岸の逍遙六なり、古宮趾の低回七なり、方丈の夜坐八なり、その餘多々、悉く擧く可からず。九月四日は佛國現共和政創建の日、以て對岸ブウロオニュの河畔に名つく、河を隔てゝ散雲寺塔を望む、尤も夕陽に可なり。

○樂劇を觀る

歐西の美術を區分する、彫刻、建築、繪畫、音樂、詩文、及戲曲を單純美術とし、是等の一二以上を兼ぬるを複雜美術とす。複雜美術の中に就いて、尤も高尙なるを演劇、就中樂劇とす。蓋し樂劇は、莊大なる建築の中にて、優美なる彫刻繪畫の裝飾を有する舞臺の上に、カアライルの所謂英雄神が、暫く詩人として作り成せる戲曲をば、尤も博大にして雅正なる音樂によりて、天下の名優の之を演する者なればなり。巴里の樂劇オペラ座は、國立に係り、號して天下第一と稱す。其建築の費す所、地形に四百二十萬圓、建物等に千四百六十萬圓、總計約千九百萬圓、凡そ天下の名技を集め、佛國の爲に巴里の爲に、世界に誇視すべき一具を興へむと期せる者、

なり。吾去年夏墺都維也納に遊ひ、詩聖ギョエテの作に基つけるマルガレエトを觀、其技の巧妙と、建築の莊大とに歎服せしが、今巴里に遊びて、同曲ファウストを觀るに及びて、乃ち曩者の遂に如かざるを知る。二月二十六日、新紙報していふ、此夕ロメオ及ジュリエット曲を演すべしと、乃ち復行いて之を觀る。定時に先たつこと十五分、既に滿場を告ぐ。ロメオはアルワレエ君之を演し、ジュリエットはアクテ孃之に份す、ゲルトルウド、ロオレント以下、役を配すること差あり。曲は所謂詩人中の詩人、英雄神中の英雄神、古今の異人を以て目せらるゝ沙翁の作中、心中物に於いて特に逸品と稱せらるゝ者。嘲、嘵、とし、して、樂、聲、起り、繽、紛、とし、して、霓、裳、翻、る。優は且、歌ひ、且、演す、女優は、玲、瓏、珠、玉の、銀、盤、に、落つるが、如く、男優は、洪、蕩、長、江の、海、洋、に、注、く、に、似、たり。一齣を演する、約四十分、齣間毎に十分時の休憩あり。此時觀客は、三三五五相携へて、場內の廻廊、大階段、舞踏室等に逍遙す。階段、圓柱、皆大理石を以て造り、舞踏室は悉く奇木を以て床を張る。觀客は多く大禮服を用ゐる、乃ち淑女は胸と腕とを露はし、輕裾長く曳き、蘭麝遠く薫る。紳士は廣胸燕尾、往往輕節を携へ、躊如として濶步す、蓋し服裝の嚴正にして嫺雅なるは、乃ち樂劇を觀るの禮なり。大概紳士は淑女を扶け、雙臂相擁して、翺翔す、私語するものは情懷を訴ふるか、嬉笑するものは會心の佳話に接せるならむ。滿都の豪華と歡樂とを一場に集めて、復人生別に貧窮、困苦、薄倖、失望、罪惡の恐るべく厭ふへき暗黑界あるを知らざる者は、巴里樂劇に於ける半宵なり。仍りて乍ち憶ふ、吾昔東京早稻田に寓し、東京物理學校に通學す、道を隔つること里餘、夜九時敎課を了へ、寒霜を履みて歸來すれば、夜既に三更を過ぐ、疎燈蕭寂、慈親獨り爐火を新にして以て待つ、當時數學物理化學の專攻、或は頭腦の枯淡に偏して、情意の涵養に欠くあらむを恐れ、每夜寢に就くの後、ラムの沙翁譚

幾一篇を課して之を讀む、其首篇即ち此ロメオ及ジュリエット曲なり、吁嗟乎、頭を回らせば事猶昨の如し、當日何ぞ想はむ、十有一年の後、身は萬里西歐の大都に遊ひて、此夕此曲這個の感懷を作さむとは。勤勉自彊以て自個の疆域を開拓す、茫茫たる宇宙、乃ち吾が馳驅の場たらむとする。か。曲、通して五齣、夜半を以て了る。階を降りて場外街頭に出つれば、星芒燦として寒光射るに似たり。街頭士女の來往、絡繹として尙絕へず。吾はサンラザアル停車場より、瀛車に搭して西郊の散雲村舍に歸る。

中學生似水子、作る所の文章數篇を寄せ來る、情懷掬す可し、乃ち此を記して以て酬と爲す。庚子三月十六日、該撒枉死の日の翌日、夜八時半巴里西郊散雲邨舍に於いて。水城生記。

○佛蘭西座の火災

昨三月八日正午、國立大劇場フランス座火を失し、殆と其內部の全體を燒盡して夜半に至る、損失數百萬金、殊に大博覽會を前に扣へて此佛國及世界の大美術品を失へる、巴里人佛國人の傷惜宛も愛兒を喪へるが如し、座には此國高名の劇詩家、モリエル、ラシイヌ、コルチイユ、ヲルテイル等の遺物甚だ多かりしが、幸に勇敢なる消防隊の努力に賴りて大方は保全を得たりといふ。此事變に付、衆議院には即日復舊工事公債法律案、善後建議案等提出せられ、文部省にては昨夜殊に善後會議を開く、文部大臣の新聞社員に語る所に據れば第一に急速復築課を設けて熱意此に從事せしめ、第二に此座出勤の俳優をして當分二三の劇場に客興行として演せしむる事を策とすべしと。

茲に此不幸なる事變に附隨して尤も人心を傷ましめたるは、此事變唯一の犧牲が絕艶花の如き女優ジャアヌ、アンリオオ孃なりしこと是な

り、年、僅に二十一、去歳梨園(國立音樂演藝學校)の業を卒へ、妙技神に入る、乃ち直に選はれて此第一場に登る、昨晝興行(マチエ)のバジャゼエ曲中ザイイル姫に份せむが爲に、正午前十五分其母に辭して劇場に入り、既にして災に斃る。母氏亦女優として佳名あり、祖父は則ち有名の劇評家たり、火燄方に其猛威を逞うするや、母氏其女を索むること狂せるが如く、其遂に在らざるに於いて卒倒絶息せる、人皆酸鼻せざるなし。午後五時、佛蘭西共和國大統領、此高名有望の技術家の不幸不慮なる終焉に對して鄭重なる吊詞を贈る。

此日祝融の災、劇場の前庭には、政治家、將校、市の紳士等來り聚る、蓋し此庭の未た曾て見さりし貴賓の賁臨なりといへり、亦以て此國風俗の一端を見るべし。

○移居

散雲郷、その江流の清と園林の幽とを以て、夏時都人避暑の好地たり、屋室を貸して以て生を營む者尤も此季を以て期と爲す、大手通りなる吾が僑居、もと四室二房を以て第三階の所帶を成す、而して吾が賃する所乃ち其二室、故を以て初より賃貸春末を以て限とす、四月一日、新に幽雅淨潔の二室を郷の學校街に得、乃ち居を茲に移す、室は樓上に在りて東南に面し、近く散雲寺塔の鐘樓を望む、後庭數弓、芝草青く、花樹蕭疎、一隅に鳩、鷄、及兎數疋を飼ふ、主人は陸軍獵騎兵の豫備中尉、現にソルボンヌ文科大學に書記たり、細君家事百端を躬らし、毎日午前時間傭ひの婢あり、來りて庖役に當る、平日家人は厨房に食し、吾は多く巴里に行く、日曜には則ち家人と吾と、食堂に會食するを例とす、

主人及その家族皆熱心なる宗教派に屬す、一子モオリス年十一、日々清音對岸ブウロオニュなる宗教中學に通學し、又英語及ヂオロンの私教師ありて、語は隔日、樂は週二回、來りて業を授く。吾茲に宗教派といひ、宗教家といはず、蓋し我國の進歩派といひ、自由派といひ、若くは積極派軍人派といふに似て、必ずしも宗教其者に熱意し之に率由し之を躬行するに非ず、唯これを標榜し若くは之を標榜する者と相黨引すといふのみ、是故に宗教派必ずしも信心家にあらず、歐西多數の良民は皆此類にて、その異人種に臨むや、必ず耶蘇教を標榜するも、退いて其私を顧れば、決して信仰の篤きを見出す能はざる者、唯耶蘇教を旗幟として相引き相黨するのみ、寧ろ之を耶蘇教派といふべく、斷して耶蘇教國若くは耶蘇教家の名目を許すべきに非さるなり。

大凡そ佛國現時の黨派政治上に社會上に將た教育上に概して二類の派別に隨うて相與するものに似たり。而して高邁の識者は固より與ら、直に社稷民人を以て念とするは言ふまでもなし。政治上に於ける二派は共和黨及非共和黨にして、共和黨は現制維持を旨とし、非共和黨は之に反對して、オルレアン黨、ボナパルト黨之に大同す。社會上に於ける二派は、社會黨及非社會派にして、下層人民の繁榮を增進せむとする平等主義者、及秩序を主として遂に階級の維持に趁り、貴族主義に流るゝ者流を含む。而して其教育上に於ける、亦二派の別を生す、否寧ろ此派別より他の政治上社會上の派別を生したるやの觀なきに非す。これ即ち宗教教育派及獨立國民教育派の別にして、甲は飽くまで教育の根諦を羅馬加特力教に置くを旨とし、教育及訓錬はこれを僧徒に委し、學術教師は唯授業師たるに止め、學校は多く寺院若くは教會附屬とし、羅馬法王をこの世の尊き者に崇むる者なり、モオリスが携ふる宗教倫理教

科書を讀むに、あらゆる宗教にては耶蘇教が第一なること、耶蘇教中一切の分派にては羅馬加特力教が最優なることを說きて、其一箇條に、希臘教の禮拜、胸に神聖十字を劃するや、右より左に横線を引く、これ神の御意にあらず、わが加特力教にては左より右に劃す、これこそ眞の神の御意なれと教へたり。此主義の教育の弊害を熟察し、斷然數百年來の弊習を一洗して、教育は國家以外なる宗教社會より、實に其組織の發達に於いて、佛蘭西共和國の國家體制よりも幼稚粗野にして文明の進歩に後るゝこと數等なる羅馬加特力教の宗教體制より獨立して、國民的經營に須つべき者なるを主張する者、即ち獨立國民教育派を成す。

是等の派別、現今にては、共和黨は帝政、王政黨よりも、社會黨は非社會派よりも、而して獨立國民教育派は宗教教育派よりも、次第に勢力を伸張するは明白の事實なり、而も宗教の勢力や、主として婦人後閨に浸潤す。蓋し東方諸國の或る時代に於けるが如く、婦人は一切の社會表面に立ち出でざるのみならず、亦無益の宮寺詣でをも節制せらるゝに於いては、特に宗教の婦人社會に勢力を逞うすること少きも、歐州の社會の實狀、甲を制限して乙を制限せず、婦人の頭腦が殆ど宗教の獨占專制に委せらるゝ、亦必至の勢といふべし。是故に中等社會の母姉、多く其子女を宗教學校に送るを喜ぶ、宗教學校なるもの、亦力めて這般巾幗者流の眷顧を迎へむ爲に、子女を教育する、大概十八世紀的風尙を以てし、袂袴綺羅、溫雅柔順、主として希臘羅甸の死語、音樂美術の末技を教へ、日新實用の學識藝術の教養は、殆と措いて顧みず、宗教の社會に於ける、今や既に特に無形道德上の効果の觀るべきなく、僧徒の汚行、却りて病毒の源となる、而もその假寐蟠屈の勢、容易に拔く可からず、頃者仄聞するに、識者の間亦實に拔本塞源の英斷を要するの議ありと云ふ。

大概宗教派は非社會派に帝政王政派に屬し、國民教育派は社會派共和黨に屬す而して軍人は多く帝王を謳歌する者、那玻崙の下に見し此國民の快夢は容易に未た覺めざればなり。僑居の主人は軍人、オルレアン黨、而して宗教派なり、家に一狗兒を畜ふ、家人之を呼びてルウベエ(共和國大統領)といひ、ゾラといひ、ドレイフュといふ。

一九〇一年一月、佛國政府竟に意を決して宗教組合法案を議會に提出す、大要亦教會が學校設立其他の事業に勢力を逞うするに制限を置きて、以て國運の進歩に對する一阻害を除くに在り、些少の修正を以て、確定通過せり。

○市廳の夜會

世界大博覽會、四月十四日を以て開設せらる。二十一日巴里市廳、盛宴を張る、賓客四百五十人、夜七時半始まり、九時了る。十時更に大夜會の設あり、夜會の場、飾るに明燈麗花を以てし、衛るに共和國近衛騎兵第一聯隊兵勇若干を以てし、劍佩錚々、滿都の淑女縉紳、及異邦名流の此都に淹在する者、招かれて一堂に會し、翩翩趨走、長裙曳々、輕靴躡如、而して女優の妙曲、伶樂の佳調、嚶嚶喨喨として其間に起る、亦世界豪奢の一異采なり。

此日恰も中曆水城子の誕辰に會す、家山閑莊、清筵小賀の狀を想見し、萬里海外、紅媛白客の歌吹海裏、亦一種の感ありて存す。

○死せる紅顏生ける白骨

六月二日土曜日、巴里市下なるカタコムを觀る。カタコムは當地下の隧道、洞穴、或は云ふ、二千年前羅馬時代、石材を切り出たす爲に鑿てる者なりと、かゝる洞穴巴里市大半の地底を成す。百五十年前その崩潰喰ひ

止めの工事を施す、既にして當時市内墓地整理の事あり、發掘せる枯骨は、總へて之を此隧洞中に投入す、今を距ること九十年前、一八一〇年、更に令して骸骨の整然たる陳列を成さしむ、巴里市中第五の町用屯所より入る者を其入口の一とす、凡そ骸骨の地下街、その長さ七町餘、隧道の入口より出口に至る、總長十四町に達す、收むる所の骸骨、實に六百萬に上るといふ、觀覽を欲する者、豫め巴里市廳に出願して許可を得、第一第三土曜、午後零時四十五分を以て入場の時刻とす、

此日例刻町屯所の前に至る群集亡慮三百餘、外國人あり、佛國人あり、妙齡の婦人あり、鬚髯の壯夫あり、各場外嚮く所の手燭を買ひ、手に〳〵之を携へ、守衛の案内に導かれて以て入る、洞の入口僅に一人を通す、忽ち石階あり、七十餘級下り行けば、身は既に巴里街下五十餘尺の地底に在り、隧道巾三四尺、高六七尺、ゆき〳〵て一鐵門に達す、門扉開け一守衛ありて立つ、之を骸骨街の入口と爲す、骸骨の積み方、手足等長大の骨を累ねると二尺許、其上乃ち髑髏を陳列し、更に手足の骨を積み、また髑髏を陳列し、此の如くにして約七尺の高に至る、宛然柴薪を積めるに類す、隧道九十九折、若し一たび案内を失はば、則ち永却此を出つるに由なからむとす、處々に石碑あり、或は某々の年某々の墓地を處分せるより來れる旨を記し、或は亦羅甸語若くは佛蘭西語をもて、諸行無常、色即是空、的の語句を刻す、例へば「死は吾が所得あり、」「汝等すべて早晩汝等を誘ふべき運命を覺悟して、後生を願ふることを懈るなかれ」のごとし、幽暗の墳、陰森の氣人を襲ふ、

隧洞内に在ること約四十分、午後二時を以て再び娑婆に出づ、入口を距ること實に數町の遠きに在り、此日巴里の大遊園、西邊のボワ、ド、ブウロオニュ森林に「花祭」といふあり、乃ち一馬車を驅りてこれに遊ぶ、花祭

は蓋し近時の創始する所、巴城豪奢の一大事例に足る者。

東西一里、南北一里半の廣袤を有するボワの大森林中、四通八達の大道の一に、アヴニウ、ド、ロンシャムあり、花祭の場は主として此處に在り。巴里の縉紳富豪より、以て全盛の傾城風情に及ぶ、花卉を以て馬車を飾り、絡繹として此道を錬り行く、その裝飾や各〻趣向を凝らす、審判者あり、意匠の最も優れる者は賞を受く。或は花もて四輪を埋めたるあり、或は馬にも花の衣を被せたるあり、車上の人の今日を晴と着飾れるは言はずもがなり、妍麗花を羞ちしむる佳姫、瀟灑白面の好紳士、白髯の老人に皺面の老夫人、髫齔の小童少女おのかしゝ花、手に持ちて車上ゆたかに練り廻はす。既にして車行漸く繁く、車と車との間、及見物人と車との間、頻に花の贈答むり、その漸く盛なるや、贈答は遂に花合戰となり、ロンシャムの街上、狼籍たる花卉を以て埋もるゝに至り、薄暮に及ひて僅に散ず。

花祭に關する經濟を聞くに、馬車は一頭曳の入場料二十法即ち八圓、二頭曳のは十六圓、馬車を儆ふものは別に儆料五十圓を要す、而して拋ち去る所の花に至りては、此寒國花卉の貴き、眞に想像の外に出づ、大抵薔薇一輪五錢乃至數十錢、その餘推して知るべし場内の見物人も、亦悉く入場料八十錢を拂うて入る、是等往々花卉を携へず、拋たるゝ所の花の多少を競ひ、拋つ人の妍醜を角す、亦一興なり。

馬車の入場の人士に、大概四等あり、其尤も上流なるは眞個此地の上流富貴の人、こは全員の三分を占む。次に外國人二分。次に中流の人士馬車を儆うて入る者、最下を所謂高等地獄とす、全員の三分一はたしかに此連中と見受けたり、鮮衣厚粧、大概その朋輩と、二人共同して一馬車を賃す、その飾る所の花卉、その裝ふ所の衣裳、その乘る所の馬車、鮮麗實に

第一流に屬す、豪奢想ふ可し、聞說我某大勳曾て此地に遊ふや、購ふ所の妓一夕價三百金、大勳乃ち六百金を與ふ、今に至るまで妓の歎稱する所とす、某公子の昔此地に在るや、下二十錢より上五百金に迄る、種々の段階、探討殆と悉くといふ、亦以て此階級の複雜とその豪奢の無極なるを觀るべきなり。

曾て某公使館書記官あり、二百金を以て趣向を凝らし、此花祭に赴く、謂へらく、第一の賞は必す乃公の手に落ちむと、而して遂に其志を得ず、今に至るまで此地邦人間の話柄たり、抛つ所の花卉は、牡丹、芍藥、薔薇、石竹、常夏を尤も多しとす、往々亦紅絹を以て花卉を束ぬ、眞にこれ千金一擲なり、見物人中、若く妍き半、地獄あり、車上の紳士、これに向うて、抛つもの尤も多々、亦笑ふべし。

花祭の所得は、以て巡査、消防等公事に斃れたる者の遺族を救恤するに充つといふ、而して抛つ所の花の代償は、實に永久の消費なり、此日炎蒸、既にして密雲、既にして雨、流石豪奢の巴里ッ子も車の毋衣をおほへるもの大半、以て彼等の氣前を見るに足る。

今の所見を以て之を曩に見る所に比す、眞個妙絶の對向とす、累々たる枯骨と、紛々たる紅紫と、正にこれ人間運命の兩極端、而して實に同一事物の兩面たり、抑、人生の眞相や、實に彼に在らす、亦此に在らず、而して世の子々たるもの、彼を懼れ此を羨む、滔々たるもの世皆これなり、哲人の憫む所、俗士の苦む所、半日同遊の士と相語り、生稻樓に和食して、明日將に此都を去らむとする、立花學士を送り、暮雲細雨、街鐵に便して、散雲、鄉の村舍に歸る。

○萬國婦人會議

六月十八日より二十三日に至る、萬國婦人會議開設せらる、凡そ所謂文明諸國、代表參列員を派せざるなし、我國未た這種の婦人協會あらず、故を以て參列員來らず、蓋し婦人問題は方今社會問題の隨一、水城子乃ち刺を投して加入す、會長幹事以下皆此國巾幗者流の錚々、會する者總べて五百餘人、就中有髯者流、僅に二十の一に居る、會開け、演說、討論、英華爛發、時には乃ち喧囂、雷雨、時には乃ち平靜寂肅、壇に登りて叱咤する者、座に在りて默聽する者、毫も男子の會合に異なる者なし、會場の秩序、參列員の外、發言する者概ね每に長老、是を奇と爲す、衆中、言論に、幹旋に、少しく頭角を見はす者、殆と皆奇零以下の相貌たり、花の如き者、玉の如き者、座中幾人、蓋し皆有るが如く無きが如し、また一奇とするに足る、會合分ちて二部と爲す、午前を部會と爲し午後を總會と爲す、昨二十三日午後會了る、夜八時宴會、初は肅然、中ころ洋々、而して終は則ち紛如雜如、嗚乎、女人地位の振はざる、良に以あるかな、會期中、獨逸博覽會總裁、會員を招待す、會了り、次の總會總裁は、則ち米國某夫人選に當り、而して會場は則ち獨都伯林之に充つ、事因果ある、亦以て見る可きなり、此會水城子の加入、會期に切迫す、故を以て講演の時を得るに及ばず、而して會幹の優遇、全く各國特派の參列員に侔し、英米參列の某々女史、殊に刺を通して談話を求む、亦得る所有り、女史曰はく、凡そ女權の振はざる、宇內萬國、宜く支那を以て極と爲すべし、而して乃ち西太后の專恣、縱逸あり、慶立、附大拇を乘りて以て四億の大國に臨み、滿朝の宗室、紳、敢て或は違言、あるなし、是れ天下の最大怪事、解す可からざる所なりと、歐西女子の思想情致、單純簡率、概ね此に類す、

○今樣列子

七月六日、同遊と巴里城中のエッフェル塔に登る。塔鐵柱を以て構成し、矗立千尺(讀んで字の如し)、昇降に動車を以てし、行路の難を覺ゑず、四望豁然、遠郊近街、歷々として指顧の間に在り、眼下博覽會の小屋大館、蜂巣の如く、來往の人衆、螻蟻の聚散に異なるなし。時方に盛暑、而して塔頂天飈、颯々、肌膚爽然、殆と久しく住まるに堪へず、登臨の壯にして快なる、近時の罕に遭ふ所、重陽の節に非すと雖も、雲霧蒸重、遊子の情なきに非ざるなり。

巴里城郊、風船業者あり、籃籃毎に六人を載せ、空中千尺の高に至る、飄々然、茫々乎、列子の風に御するが如く、坡仙の羽化するに似たり。一條の麻索、以て地底に繫ぐ、蓋し生命の綱、而して繫縛の業なる者か。七月十三日午後、水城子一友と同しく登臨す。

○川上劇

十月十四日、和蘭來の舊友と、劇を博覽會内川上音二郎一座に觀る。曲は名古屋不破鞘當及道成寺の折衷して成れる者、實に音二の創作なり。其妻定奴葛城に份す、風姿宛轉、眉目清秀、演技亦頗る佳、就中その神を役し丰を用ゐる、尤も微細に入る。巴里の新紙評して云ふ、日本劇を改革する者は、それ定奴夫人かと。惟ふに博覽會裏、我美術の出品、糊塗庶弱、蓋し能く一奴の技に及ぶ者なし。云ふ、奴はもと葭町の歌妓、蓋し山海千年の豪なりと。常に謂ふ、歐西に舞樂なし、之有るは唯我邦是のみ。今川上劇を觀るに、眞に茶番の流亞、而してその演する所、カッポレ、僧舞、皆既に宛轉曲折の妙に入る、況んや乃ち奴演ずる所の靜、花散里等の諸舞曲、直にとれ宇内の美觀、而してその本邦に在るや、乃ち特に舞樂の竹頭木屑、所謂

尋常茶飯の類のみ。奴の妙技然らしむる所と雖も、抑亦本邦美術の發達、洵に此の如きを致すなり。彼の丹青者流、將に何に據りて而して立つ有らむとするか。

○女優の樂屋

二月八日夜、知友シャルヽロオランの招く所と爲り、「女騎士曲」をサラアベルナアル座に觀る。劇作者リシバンは、實にロオランの友、ロオラン乃ち紹介して相見せしむ。リシバン年僅に二十一、作る所の數曲、名聲嘖々。ロオラン又女優ラバルスリイを紹介して、その裝房に會見せしむ、優は實に女騎士に份せる者、年二十三、夙に梨園の第に登り、尤も男裝の婦人に份するに妙なり、此夕會見、往返過る所、舞場の道具、大廊、小廊、觀るとして奇ならざるなし、尤もロオランに多謝する所、年の五月、作者女優と婚す。

○易婚難姻

二月十三日、佛國衆議院議長ボオル、デシャヲル君、ジェルメエヌ、ブリイス嬢と、婚儀を巴里第六區役所に擧ぐ、大統領ルウベエ氏證人たり。君年四十六、其父エミル、デシャヲル氏現に佛國大學院教授たり。嬢年二十五、實に衆議院議員ブリイス氏の女なり。その寺院儀式は、應に來る十六土曜日に在るべしといふ。月の七日、和蘭女王獨逸聯邦シエリイン大公ハインリヒと婚す、デシャヲル君の婚姻と併せて、歐洲近時の二大婚たり、共に日々新紙面の强半を奄有す。

歐洲の現下、二の婚姻難あり、西班牙の一宗室、異教の淑姫を娶り、人民の反抗劇甚、國都血を流す、獨逸王子、英の王女と婚するの風說、乍ち國民、

の激昂を招く、一成一敗亦以て國情を見るに足る。

○冠婚葬祭

始めて散雲鄉に入り、居をトせる處、街樹を隔てゝバキヨン、ブルウに對す、これ鄉の旗亭の雄、巴城に在りても亦罕に見る所とす、都人士の婚後馬車を近郊に驅るもの、多く此を以て地と爲す、蓋し道にボワに由り、清音の河畔に沿ひ、而して到る處乃ち近郊遊區の白眉に居ればなり、大概午後二時に始まり、午後六時に至りて歸城す、秋冬の交、此の如き者毎日二三群を下ること稀なり。

凡そ佛國の婚儀、法儀と敎儀との二部を以て大成す、棠棣苟藥、男女相歡の情を相通ずる、男は女の父兄に向うて婚娶を求む、父兄の合意を以て天緣乃ち熟す、而して法儀先つ來る、法儀は當事者市町村役場に出頭して之を行ふ、一に民法規定する所の如し、敎儀は概ねこれに後るゝこと數日、黃道吉日をトし、大寺觀に於いて之を行ふ、來賓は此時を以て之に列し、且概ね公衆の縱覽を許す、大概午後零時十分を以て式を始む、新郎新婦皆大禮の服を裝ひ、郎は純黑、婦は純白を用ゐ、別に薄縑の被衣を加ふ、一對の童男童女嚮導を爲し、新郎新婦を扶けて肅々として玉階を登る、證人親族賓客等次第にこれに次ぐ、敎儀は僧正の司る所、嚴肅莊重なる式言あり、神前の誓詞了りて、復たび童男童女の先導にて寺觀を出づ、乃ち馬車を驅り賓客一般近郊に遊び、嬉戲舞踏、以て晚景に及ぶ、而して後城中に歸りて饗宴を開く、新郎新婦は此席よりして所謂蜜月の旅行に上る者、歐州婚姻の手續率ね此の如し。

歐州また元服の禮あり、獨逸新敎にては男女十四歲に達するや、或は秋或は春、寺院の特に設けたる定日に於いて、式を其内に行ふ、此時を以

て男子は始めて踵に達する長袴を、女子は始めて裾を曳くの長裳を穿つ、其色黑を用ゐる。式には數百の男女子あり、大概其母姉これに參す、女子は左側、男子は右側に坐し(椅子に)、毎回三人つゝ進みて牧師の高壇に登り、跪つきて式言を承く、牧師誦する所の經文、毎回差あり、蓋し西俗耶蘇教の洗禮、無心の嬰骸にして之を受くるが故に、今乃ちこれを確むるの旨なるべし。佛國加特力教にては十二歲にしてコムミユニオンあり、十四歲にして更にコムフィルマシオンあり、以て元服の禮を大成す、式は大抵獨逸新教に同じ、唯男女共に服色白を用ゐ、男子亦寺院の稚兒の如き服裝を爲すを異とするのみ。

己亥の歲六月廿九日、吾が伯林の寓グロオト君の一子、外科手術の失の爲に殤す、葬儀は家の客室に於いて之を營み、親戚朋友皆黑色の禮裝にて來り會す、グロオト君知る所の牧師某これが導師たり、その柩前の說述、死者に向はずして寧ろ生者に向ふ、式半時にして了り、葬儀用の馬車にて之を西北郊の共同墓地に送葬す、葬は埋葬なり。乃ち家に歸るや式全く此に終る、實に簡單の極なり、唯送葬の途上遇ふ所、知るゝと知らざると、皆帽を脫して禮意を表す、佛國にては大家の送葬、殆ど一輛の馬車を見ず、一樣の黑色禮裝、皆徒步して棺後に隨ふ、誠に蕭々肅々たり、葬式を以て虛榮とするの陋俗は、此國に在りて尙未た淺きが如し。

東洋に所謂人の大禮の中、冠婚葬の三者其歐西に整備せる此の如し、歐陽修の日本刀を詠せる、先王の典籍夷貊に藏まるの歎、吾人亦之を今日に復たびせざるを得ず。唯全く歐西に見るを得ざる所の者は實に祭なり。所謂愼終追遠の至情は、多く之を典は歐西の全く爲さゝる所たり。

かく人生の三大禮、皆教儀を以て重しとするも、之を以て宗教の現時

の勢力を推度すべからず。一般民衆の寺院に於ける、唯這般禮儀の場として、之を視るのみ、毫も我寺院の葬祭の場たると異なるなし、彼我寺院の職能の相異は、唯海外布教の一點に在りて、其内國に於ける地位は、彼此酷た相似たり。三大禮儀の宗教に於ける、實にその過去の勢力の遺骸たるのみ、以てその現在及將來の勢力を卜す可きに非さるなり。

祭儀は歐西の全く闕如せる所なるも、送葬の鄭重なるに應して、墓域の宏壯なるは殆と意想の外に在り。大概巴里共同墓地の制、二十年を一期として貸附す、その繼續を欲し若くは永借を願ふ者、特に料金を納れさる可からず。塋域多く花崗石大理石を以て祠堂を建つ、その然らさる者も亦堅緻莊麗なる建碑なきはなし。我邦に渡來せる耶蘇教僧徒、わが墓地建碑を以て迷信と爲す、直に佛教の紀念の彼等に目障りなるを除却せむとするの譎策のみ、此類のこと、奸譎陰險にして女性的なる宗教者流に毎に見る所、油斷す可からず、

○佛蘭西の丁髷

獨、墺、佛、等の、觀、劇、往、々、古、代、風、俗、を、實、見、する、の、便、あり、沙翁劇の如きは尤も亦此方面にも興味あるべきも、大陸にては此に接すること數〻ならず、思ふに將に英國に遊ふを待ちて然る後にすべしとせむ、第十八世紀より第十九世紀の前半に至る、革命に前後せる時代の世話物が、往々滑稽劇の趣に演せらるゝこと、我能樂に於ける狂言の類なからず、大名といふ古物は、尤も滑稽の主人公たるに適する、日本も佛蘭西も變りなし

三月六日、マドモアゼル、ド、ラ、セイグリエエルといふ曲を佛蘭西座に觀る、麥蒔俟爵といふ人、革命時代の馬鹿大名として、たわいもなき事をするといふ筋なり。その風俗すべて繪にかきたる通りなるが、就中髷の

結ひ方、總髮を背後に細ききれにて結ひ、餘を垂れ下げたる、尤も滑稽なり、すべて當時一般の風、かく奇麗に結ふに至らぬまでも、皆長髮を垂れ下げたる者なりき。今の五分刈短髮の俗と相比すれば、變化亦驚く可し。

仍りて思ふ、長髮の俗は是れ佛蘭西の丁髷なり。明治十五六年の交、我々の田舍にも亦自由黨といふ長髮黨ありき、彼等は佛蘭西の丁髷に倣し、革命時代の丁髷的思想を以て日本の丁髷的思想慣習を排斥する急先鋒を以て任せしなり。而して板垣氏や實に當年舶來丁髷黨の首領として、麥蒔侯爵たけの御伎倆は確に之有りし偉人とす、マイエルの會話字典等によりて、其名の遠く海外に聞ゆる、宜なるかな。

○巴里の教育

佛國の教育は、新思想即ち社會的共和的思想と舊思想即ち宗教的君權的思想との間に、迷疑的に彷徨しつゝあり。一面には優柔不活潑、一面には急進無秩序、弊や皆これより來る、此大本の根基未だ固からざるより、教授法の如き學科配當の如き、皆未だ整肅と安固と摯實とを得さるの觀あり。

佛國にては、初等教育、中等教育、及高等教育、此三類は階級に非すして寧ろ種類を表し、各類皆それ自個に於いて完全す。初等教育は初等學校及高級初等學校の二程あり、一般普通の國民教育義務教育は、初等學校八年の中六年を修了すれば足れりと爲し、更に一通りの實用教育を受けむとする者は、高級初等學校に入りて五年の修業を成す、これにて村會議員小商店の番頭等には十分なる知識を習得す。中等教育は、所謂リセエ若くはコレエヂといふ者これに當り、正科は通例九年の課程なれども、往々其前に學齡に達せる者を直に收養するに足るべき前修科を

附設し、その後には更に他の或る高等教育機關に入學の試驗を受くる準備の補修受驗科を設く、殊にコレエヂは寧ろ其目的この受驗に在るを以て補修科を欠く者殆と罕なり。リセエを卒へて國家試驗を受け及第せるものはバシリエの稱號を受く。次に高等教育は、各種の高等專門學校及大學にして、大學にはバシリエは皆入學するを得れども、高等專門學校には更に少くとも一年、多きは數年の補修を積みたる上に非ざれば入學し得ず、主として學術技藝を要する砲工科等の陸軍士官其他を養成する百工學校を始め、道路橋梁學校、礦山學校、技術製造中央學校等即ちこれなり。これらの上に、別に純然たる研究機關として高等研究學校あり、學問奬勵の府としてコレエヂ、ド、フランスあり、學問藝術優待の府として佛國學士會院あり。その他教員養成の師範學校は、初等教育の教員を養成する初等師範學校、此校の教員を養或する初等教育高等師範學校、及中等並に高等教育の教員養成を目的とする高等師範學校、各男女に區別して設備あり。右の中、高等專門學校以上及師範學校を除くの外國家の經營に對抗して寺院宗教の經營に係る各種學校あり、就中中等教育の設備尤も盛なり。

大體右の學校系統に在りて、尤も注目すべきは、大學の頗る低度にして、高等專門學校の寧ろ高尚なること一なり、初等中等高等各教育の全く種類を異にして各それ自身に於いて完全なること二なり。巴里大學の學生一萬二千といふも、東京の大學及六大法律學校濟生學舍等を合して學生の數一萬五千と謂るの類なり。中等教育は特に專門職業の教育に非すして、全く人格を養成するを目的とす、故に高等にして普通人が達し得る教育機關即ち大學の爲には豫備となり得るも、普通人を對手とせざる高等專門學校には豫備となり得ず。大學はかく普通人を對

手とするが故に、その講義も公開、その程度も低度なる者なり。

中等教育の得業生即ちバシリエは、文學のバシリエと科學のバシリエとあり、甲は古風の學をせる者にして、乙は當世流の學をせる者なり。高等專門學校は尤も纏まりたる學費を要し、(技術製造中央學校は一人一ヶ年千六百圓以上二千四百圓、百工學校はその以上)入學も亦嚴重なる試驗を經るを要するが故に學生の修業も頗る眞面目なれど、大學は誰も行き得る處なるが故に學生は甚だ眞味に勉强せず、校門を出入する者の數に比して、卒業者の甚だ少きは、恰も我國の濟生學舍に類すかくて政治經濟法律等、仕官向きの高等專門學校は、巴里政治學校と稱する完全なる私立學校あり、此處には學生は一學期百二十圓といふ高き授業料を拂うて通學す、慷慨家のドモランか所謂受驗教育、暖め教育、とぎふかし教育なる者、正に此邊の實況なり。さりながら受驗もせず、暖めもせずして大學風の教育がよきにも非ず、受驗の爲に學問する高等專門學校及政治學校の學生は、大學に出入する多數のからくら書生よりは遙に優れり。要するに佛國教育の最大弱點は、宗教思想と社會思想との間に彷徨する懷疑的態度の爲に社會及國家が鮮明なる旗幟を樹て秩然快然たる一大根本的刷新を成し得ざるに在り。

されば學生の風儀も亦これによりて料り知るに難からざるべし。日曜日、木曜の午後などに、市街や公園を、氣の利かぬ坊主舍監に導かれて、羊飼ひと羊との如くに練り行く一群の年少書生に逢ふこと屢〻なるが、これ即ち宗教學校の連中にて、社會は自ら仕たい放題を爲し、學生をばこれに近よらせじと心配する有樣、正に我國の女學生の取締り、師範學生の取締りに似たり。固より此の如きは到底有効なる方法に非ず、かゝるコレエヂの受驗科生が、一朝高等專門學校の入學試驗に及第する

や、相集りて、怪しげなる婦女を携へ、學生街あたりを練り行く氣晴らし親睦會も、年に一度位はこれを見るなり。

大學生は、一ヶ月十四圓位の六疊敷程の薄暗き下宿住ひに、放埒なる、不熱心なる生活を爲すを常とす。所謂學校街とて、我國の神田本郷ともいふべき所には、かゝる學生に相應する安直辻君多數に徘徊す、此地方に有名なるビリエエと稱する踊り場は、これらの學生及辻君の共同倶樂部たるの觀ありといふ。

高等專門學校學生は、規律ある寄宿舍の生活を爲すを常規とし、能はざるものは、半寄宿生とて、晝食を學校に於いてし、豫習復習も亦學校に於いてし、唯寢とまりを自宅に於いてす。彼等は費用も多く、萬事究屈なるたけ、失敗者を出たすこと較〻罕なりとす。

女學校の位置か巴里に於いて尤も如何敷部分に在るは甚た奇なり。

バチニヨルの女子初等師範學校、マルチル街の女子高級初等學校、サンタンドレ、デザアル街のフエマロン女子中學校、數へ來れば此の如き者多々、抑〻以て傍近風俗の頽蕩を救濟せむとするか、それ竟に一掬の水を以て燎原の火を救ふが如けむ。唯フオン、トヲエオオロオズの初等教育高等女子師範學校、及セエヴルの女子高等師範學校は、較〻其處を得たりとすべし。但し土日曜日には、泊り掛の外出勝手たれば、要するに人爲的取締りは毫も嚴重ならずと見るべし。

之を要するに、世界人類の好尚が今日の如く劣等なるに當りて、世界の遊園たる巴里が、這般劣等なる好尚を滿足せしむるやう出來居る事は固より必然とすべく、教育地として巴里の言ふに足らざるは自然なるべし。佛國全體が此の如くにはあらざるべけれど、首府は兎角全國の矜式する所と爲るものなれば、世界の遊園を首府とせる佛國は、教育的

には甚だ不幸なりと謂ふべし。

○勤儉貯蓄の巴里

路易十四世前後の華やかなる朝廷が、磨きに琢ける佳麗紅紫の紛々は、世界をして巴里を遊園視せしめ、巴里亦世界の遊園を以て自ら居り、乃ち大に市街の設備を完うし、美麗にし、巧妙なる市債事業を起して、世界に於ける摸範的大都會を現出せり。東西三里、南北二里、面積十方里に過ぎざる巴里市、不動産の價格實に六十七億圓といふ、即ち我國田畠宅地の總價に較ぐ、亦驚く可しとせざらむや。

之を我國の遊ひ處、京都、新潟等に觀る、他處より遊びに來る者は以て萬金を揮ずするの楊州と爲せども、其土着の住民は則ち營々蓄積、錙銖を爭ひ絲毫を利し、用意周匝殆と至らざるなし、今之を巴里市人に觀る、

亦正に斯の如き者あり、勤儉貯蓄は此地の一特色、則ち彼の娼婦の如き、亦往々鉅富を致す者ありと云ふ、之を聞く、巴里の娼婦其數八萬、その稼ぐ所一年二億圓を下らずと、則ち酒食の肆、貸坐敷(所謂ホテル)業者の所得、亦之に準するを知るべし。

佛國田舍人の生活は、殊に儉薄質素、毫も肉食國と稱する程の實なし、褐色の麵包、林擒汁、豚の脂、是れ彼等の珍味たり、而してその生產を以て國富を致すや、腐敗し易きバタの輸出高を以て實に四千萬圓の巨額に上る。グレヂリオチエ銀行の定期預り利率百分の二、二、當座預りは則ち百分の二に至る、亦由來あるなり。之を要するに、佛人は進取的國民膨脹的國民に非ず、唯一文勘定を爲し、ぜつぜと稼ぎ、糠味噌汁を啜り、安物を以て身まはりを飾り、金を溜め、而して樂隱居を爲す所の國民なりとす。

四脚の、けもののさまは、千巖破、
神代ながらの、すがたなりといふ。

巴里たより

謹啓。其後は打絶えて御無音仕候。去六月一日より新潟新聞紙面大擴張に相成候分、既に數葉拜見、社會の伴侶として、嚮導として、二十餘年の歴史を有する發達の効果、洵に目覺敷儀と存候。七千號の佳辰も應に遠に非ざるべく、我鄉土の文化に對し、我祖國の發展に對する其責務は、愈、重大を加へむと、茲に遙に我新紙の前途を祝候。大凡そ新聞事業の發達は、一國の文化をトする最好の尺度なること、民を愚にするを以て政治の要諦と心得る野蠻政治家、若くは野蠻教育家の外は、今日誰として之を認めぬはなき儀と存候。伯林にて最大の發行數を有する新聞は、ロカアル、アンツァイゲルにて、小生在留の當時、日々二十六萬八千枚、巴里にては、

ル、ブチイ、ジョルナルにて、實に百十萬枚の巨額に上り候。セイヌ川を往來する川流船や、巴里市中の鐵道馬車にて、洗濯娘も、下女も、薪屋の小僧も、殆ど新聞を手にせぬはなき有樣、實に驚くべき者に候。小學校の教育は、新聞を讀み得る者を養成するを旨とすとも申す可く、新聞の價も諸色に比べては至廉にて、巴里にては三四の大新聞が一號六錢なるを除くの外、數多の新聞皆一樣に二錢に候。今回博覽會に於ける報告によれば、世界各國に於ける新刊書籍の數、去明治三十一年滿一年間にして、

獨逸	二、三七八九部	（墺の一部及瑞西の一部を含む）
佛蘭西	一、四七八一部	
露西亞	一、一五四八部	（明治廿八年）
以太利	九六七〇部	
英吉利	七五一六部	
日本	六四九七部	（明治廿八年）
墺太利	五〇〇〇部	（明治廿九年）
北米合衆國	四八八六部	
和蘭	二九六四部	
白耳義	二二七二部	
瑞典	一五五五部	
匈牙利	一四〇七部	（明治廿八年）
丁抹	一〇九二部	
諸威	五三四部	

右は國の大小も有之、數量のみを以て概論し難かるべきが、更に同明治三十一年に於ける人口百萬に付定期刊行物の數は、

北米合衆國	五一〇種

瑞西	三二〇種
白耳義	二五八種
和蘭	一八四種
獨逸	一六一種
佛蘭西	一五六種
英吉利	一一三種
墺太利	九八種
智利	八八種
以太利	七八種
日本	一七種
埃及	一一種
露西亞	七、七種
印度	三、三種

一般著作業に於いては甚だしき負を取らざる露西亞及我日本が、新聞事業の發達に於いて、大に列國の後に瞠若たるは、何か特に之を防遏するの原因ありしが爲ならざる可からず、此を顧念すれば、坐に世間實に虎よりも猛き者あるに想ひ到り候。此間に立ちて屈せず撓まず、多年斯業の爲に盡瘁せる諸士の功や洵に多とすべく、其凱歌を聞くの日も遠からぬ未來に於いて待設く可き儀と存候。

世界大博覽會も開設以來茲に三ヶ月、近時漸く殆ど完整に達し、平日は二十萬人、日曜祭日等にはその倍數の入場を迎へ居り候。我國の如きも隨分整頓の後れ候仲間の一にて、兎角の世評も有之候。凡そ參同の列國は、各部分け出品と一纒め出品との二樣に由る、一纒め出品とは一國出品の一切を、特に建設せる其國の小館（パヴィヨン）に、一まとめにして陳列する者

をいひ、各部分け出品とは、織物陶器家具農産水産機械山林海事軍事美術園藝教育衛生社會經濟等の各部の陳列館にそれ〳〵出品する者を謂ふ。各部出品の國々も、亦別に小館の建築あり、これは特に其國尤も得意の品物を陳列し、且つ交際の用に充つる目的とす。右の中、一纒め出品は申す迄もなく小國に見る所にして、歐米各大國は皆各部分け出品の國々なるが、我日本も、從來いづれの世界博覽會にても一纒め出品の地位に在りしを、今回始めて各部分け出品の地位に進めりとて、事務關係の諸員は勿論、一般在留邦人の得意とする所に候。

乍去斯く所謂大國の列に加へらるゝ以上は、責任も亦數層重大を加ふる譯にて、各部に於ける各國の品物と我品物との優劣は、一見して判せらるゝこと〻相成、平和の戰爭の事實は最早不可避事と相成候。例へば織物館に於ける我國の場處は、佛蘭西以太利の間に介り、獨逸白耳義と瑞西とを前後に控ゆといふ次第故、美は美、醜は醜にて、少しも逃かくれの出來ぬ有樣に有之候。品物實地の優劣が博覽會競爭場裡に勝を制する第一の要素なることは、言ふまでもなき事ながら、此外猶大切なる事件二つあり、場處の選定と陳列の體裁と即ち是なり。少くとも此二つに於いて、我國は大なる不利益を見たる事、皆人の尤も遺憾とする所に候。抑〻場處の選定は、各國の事務官長と當佛國政府の博覽會總裁との交渉に成る者なれば、之を決定する要素は、各國の當佛國に於ける威信と、及各國事務官長其人の材幹とに在り。我國の如き、最初は相當の場處を割りあてられたるも、他國より當國總裁へ持込みたる苦情の餘波にや、漸次片隅へ壓し附けられたるも尠からざるやに風說致し候。陳列の體裁に至りては、歐州の大都會にては、さゝやかなる小店さへ、專門の陳列師を聘して、毎月一回若くは二回陳列を整ふる有樣なるを、我博覽會

の出品は、最初は全くひとり手にて陳列せむ積なりしも、到底いけぬ所より、漸く人を傭ふことゝなれる由に承候。同じ品物も晴々しき場處に見事に飾り附けたると、薄暗き片隅に見すぼらしげに列べたるとにては、見ばえのすることに大差あり、列品の箱飾り、裝飾等が、日本固有の瀟灑高潔ともつかず、西洋流の仰山とも附かず、何處へ行きてもワニス塗の痩鳥居に、儉約の旭旗が淋しさうに翻り居る樣は、餘り體裁にも無之候。

我國も各部分け出品とは乍申、相應の出品あるは織物館と工藝館との二部のみ、山林農產敎育美術の如きは形ばかりに過ぎず、其他は大方闕略の體にて、社會經濟の部の如き、何故に貴國の出品無之儀歟と、係り員より屢〻質問せられ候次第也。織物館も、刺繍の精巧目を驚かす許なるすら、大方の觀客は、歐文の說明書が何時迄待てど揭けられざる爲に、唯の繪畫と看做して看過す者あり、且出品の大方はかゝる美術品にて、服地となるべき絹物の殆ど無之は、商略上歎ず可き事なるべし。工藝館には陶器漆器鑄金彫金等の佳作も尠からざれども、餘り玉石混淆にて、折角の佳作も見ばえせぬは惜むべし。何分廣大なる博覽會內の事故、如何にもして人の目を引く工夫肝要なるに、我列品には殆ど全く之を欠くやの感あり。美術館に於ける出品は日本畫三室と、油畫一室となるが、日本畫は諸大家特に竹頭木屑の競進會を催されたるの觀あり、油畫室の中央、例の黑田氏の裸人畫三幅對が處狹しと揭げられたるにて大概推し料らるべし。敎育の部は地震計と氣象報告とにて持切り、農產館のシンコ細工、滑稽といふの外なし。

各部の出品は概ね此類なるが、我小館に至りては、更に奇々怪々の出品を現出致候。小館は一個の本館、及三個の附屬館と園池とより成る。大

館は太和法隆寺金堂の寫とか稱する者の由なれど、ゆがめる柱に鶯色の金紛、紅がら色の丹塗は、如何に見るも我國の出品とは見受られず。其も其筈にて、佛國郵船會社の出品なる世界周遊パノラマさへ、其の日本の部には、日本の大工三名を傭ひ來りて造營せしめたるに、我日本の美術的建築の出品なる此館は、悉く當地の職人に命じたる者なれば、建築の出來む樣は無之候。附屬の三館は茶店酒舗及小間物店なるが、これも固より奇々怪々なり。乍去、小館の奇々怪々は、其建築に止まらずして、更に其場所の大奇怪なるに在り。凡そ當博覽會各國の小館建築地は二群にわかる、一は諸强國小館建築地とて、清音河の左岸諸國町といふ所より、英露獨以を始めとして、ルユクサンブルグ、モナコの小國、セルヰア、ヘルツゴヰナ等の半獨立國に至る迄、皆此處に小館を有す。一は殖民地小館建築地とて、河の右岸トロカデロ公園に在り、其の一半を佛國殖民地の小館とし、安南、アルゼリイより、ダホメイ、セネガル等の阿弗利加蠻民の生活を示す、他の一半を外國殖民地の小館とし、露領の西比利亞、英領の印度、埃及、トランスワアル、支那等あり、而して我日本は、即ち英領殖民地館、錫蘭茶館、及埃及小館に隣れる一隅の小地に、右の小館を建築せる次第に候。抑〻我日本帝國は、何れの時代に外國の屬國と相成候哉、これは、農商務省の御役人衆に承候はゞ、定めて分明に相分り候儀と存候。小生等の如き文盲者は、此頃も或る米國人に日本の小館は如何に搜すとも相知れ不申と語られ、又或る佛國の大尉に貴國は自ら强國と認められず候哉と問はれて困却致候次第に御座候。

凡そ戰爭が血を流して國家の體面を爭ふ者たるが如く、世界博覽會は即ち汗を流して國家の體面を爭ふ者たることは、今後我國の朝野に確と御認置を願度儀に有之候。廣島臨時議會に滿場一致を以て巨億の

軍事費を協賛せる忠良なる臣民は、決して博覽會費に數百萬の端錢を支出するに吝なる者に非ざるべく、唯願る所は統率の將帥如何に可有之也。今回諸强の事務官長は、大概親任官程度の經歴を有し、大體に明に、外交界に名を知られたる人士にて、少くも全權公使以上の人物なる由。昨日まで勝手口より御用伺に參候せる商人が、今日遽に或る重任を帶びて玄關より參れりとて、改まりたる挨拶は人情として致しにくき者歟と存候。四月十六日、大統領の催なるエリゼエ宮に於ける博覽會開設祝賀の晩餐會の節、諸强國は事務官長、副長以下四五人まで招かれたるさへあるに、我が唯一の招待客たる事務官長に限り、大統領は握手の禮を欠けりとの風評さへ有之候。こは固より京童の僻評と信じ候。但し博覽會大廣間の天井に、各國の紋章を畫ける中、獨り我旭日章桐葉章菊花章の何れをも欠き、門樓上列國々旗の翩々たる中、獨り我旭旗を欠くは事實に候。苟くも國家の體面を以て念と爲す諸君子は、世界博覽會を見ること、せめては成歡牙山に於ける大島混成旅團を見る位にはあり度儀と存候。

此國にては平和の博覽會に賑ひ居り候間に、我東洋の一角には近頃戰爭の世界博覽會開設相成候由、參同列國の斯技に於ける優劣は容易に判明致し候事なるべく、天下の腰拔政事家腰拔外交家には好個の强壯劑を供し候儀と相慶し候。兎角文明が進み過ぎ候ては、砂糖がなくては戰が出來ぬといふに立至候事、近頃南弗にて御覽の通に有之、歐州の外交が、如何にもして戰爭を忌避致候儀は、平和を愛するなどの高尚なる理想に基つけるにもあらず、亦單に經濟の攪亂などいふ計算上の理由にも無之次第、粗〻御推察可被下候。されば今回も、正直にして戰上手なる日本を御先に使ふ事が、當地新聞の輿論と可申候。

七月十四日はバスチル攻落の當日にて、佛蘭西共和國は此日を以て共和建國の大祭日と致し候。午後三時ブウロオニュ森中のロンシャム廣野に於いて大觀兵式あり、宿の主人なる中尉より陸軍省の特別席入場券を得て參觀致し候。歩兵十六個聯隊、砲兵騎兵各四個聯隊、工兵輜重兵若干隊、肅々整々たり。則ち肅々整々たりと雖も、之を獨逸の皇帝觀兵式（去年五月三十日伯林郊外テムペルホオフェルフェルドに擧行せられたる）に比すれば、尙獨逸のを以て我日本のに比するが如し。例へば百二十八個の歩兵中隊の横隊中、新月形若くは波狀を爲さゞる者、僅かに五六に過ぎず。觀兵式中尤も聞き者なりしは、觀客の喚呼にして、軍隊萬歲の聲は毎に「共和國萬歲」の聲を壓し、「ルウベエ（大統領）萬歲」の如きは殆ど之を聞かず。蓋し現下此國の政界、社會黨と共和黨とは政府黨にして、國民黨と王黨とは非政府黨たり、軍隊萬歲の聲は毎に右王黨及國民黨の一部より出づ。大祭の當日ポナパルト黨の機關紙オオトリテエ新聞の如き、一言も今日の大祭に言ひ及ばざりしなどは、中々の奇觀に有之候。軍隊と政府との對抗など、忌々しき事ながら、餘程注意せざれば往々陷り易き事項に可有之歟、かゝる現象は我國民に、種々の點より刮目を値する事と存候。

近日の暑熱は午後二時に日蔭にて華氏九十五度に達し、中〻我郷土の比に無之、一昨々日は日射病にて卒倒せる勞働者數十名に上り候。すべて氣候風土は、植物生育の狀態よりするも、我高山の嶺に比すべく、誠に不順に有之候。これに冬向なる家屋の構造は一層苦熱を增申候。不宣。

庚子夏七月十九日於佛國巴里西郊清音河畔サンクルウ村舍　水城生

結靴紐、頗美文明紳士也。

引張の、御言かしこみ、つくばひて、

靴の紐結ぶ、年くれにけり。

「一寸の心萬斛の愁」

大勳位侯爵伊藤君を始め、世界的とか積極的とか、進取的とかの人々が、ひたすら政友會とやらの隆盛を祈り、誰を總務委員とせば誰が滿足、誰を院内總裁とせば誰が不平なぞ、毎日〳〵人の顏色を窺ひ名簿を繰り返して時を移し、國事に關しては國民同盟會の行動は外交上國家に不利なりと認むる故に反對すと決議せしに止まり、其の一と事すら强て外に敵を設けて牆内の鬩爭を豫防せんと欲せるやに見え、淺ましとも何とも見ひ樣のなき折りから、天涯萬里に羈遊し研學を之れ專一とする者より書信を得、中に曰ふところの事、北清事變の經過を慮り憂心忡々として措くこと能はざる如くなるを看、寧ろ異

樣の感を催さゞるを得ず、近來政治運動を職業とする者の國事に冷澹にして、敎場に書を講ずる者の、却て之に趨り、剩へ理學者若くは醫學者の往々にして法學者若くは政學者に勝さる形あるは、一種の奇觀とするに値するが、わが今舉ぐる所のもの亦た斯の若くならんか、抑ゝ此間別に理由の存する事ならんか、兎に角今日の場合眞に國事を國事とする者を以て多と爲さゞるべからず、書信は八月廿二日巴里を發せしもの、一月前西歐に於ての議論を今日茲に視るは十日の菊より甚しき者あれど、尙ほ幾許か將來を戒むるに足る無しとせじ。

雪嶺記

遠地日夕の見聞技癢の感に堪へざる者多く、聊か亦思惟を費し居り候處、高論と正に符合致候次第は自ら慰むる所に御座候。事件の當座、輕卒、淺薄なる世間、頗躁狂の態を現し候者、歎宣言なき出兵を忽卒に敢てせし樣子、誠に第一着を過ち候、儀遺憾の至候、其後更に列國の總數にも近き大兵を出すに於ても、尙出兵の主旨目的に關する宣言なり詔勅なりが、一も聞ゆる莫きは、奇怪至極の儀に存候。佛國の如きは漸前週末を以一段の送兵を了候次第、獨逸ワルデルゼエの出發も昨夜羅馬に着、今明日頃乘船の都合、扨是等歐洲の新軍勢が東亞の地に到着致候頃は、所謂人道とやらに乘氣になりて進軍せる日本の大兵が、數度の激戰の後、頗己に惰氣を生せる頃なるべく、實は東亞の大問題大危機は、團匪の剿討に在らずして剿討以後の事局に存し候を、其大切なる時機に於て積極消極軍氣に主客の勢の軒輊を生し候に於ては、さらでだに無能不振の我外交の困難、今より想遣らるゝ所に御座候、愚見の杞憂は當初より實に此點に存し候事にて、事件の當初は、唯「匪徒の暴横」ば斷じて支那政

府の與る所に非ざるべきを確信するが故に、列國の輩に倣うて輕々の出兵を爲さゞるも、此事件より萬一不慮の關係事件を生じ東洋の平和に害あるが如き事起るあらば其時こそ我斷して出兵に躊躇せざる」旨の一片の宣言に止め置き、而して內國にては何時出兵するも妨なきの準備を整へ置くを上策とし、我公使館及淸國各地の居留民保護を唯一の目的として北京天津等北淸の要地、及內實示威の意味を以て此を機として同一口實の下に福建地方にも、精錬嚴肅なる各小部隊を出兵するを中策とし、乃ち北京に入りて公使館保護迄時宜によりては列國と同一步調を共にするを策とするに在り。如何なる塲合にても、際限を定めず文明とか人道とかの事業とやらの爲に、歐米列國と運動を共にし、剩へ米國以上の兵力を送るは、策の下なる者、況や二萬有餘の大兵を送り、歐米の御先棒となりて其新軍勢歡迎の下掃除を爲すが如きは下策の尤下なる者、其馬鹿加減は言語道斷と申の外なく候者歟。乍去曩者二萬有餘の兵を送り、扨列國の新軍勢到着の曉、更に同數以上の增兵を爲して、我軍氣をも列國のに劣らず大に振はしむる丈の廟算ありての事なるや、尤も疑敷儀と存候。何を言ふにも此際我が行動に就て一の宣言の詔勅の聞ゆるなきは、當局者が例の無決心無見識に座するものなるべく、國に實力あれは一枚の宣言書は數萬の動兵に優るの効ありといふ外交上の原則をも了知せざるに座する事と浩歎の至候。是迄百戰の効果は誠に犬骨折に了候事ながら、唯此上は東洋永遠の平和を標的とし、虎狼の國をして其慾を擅にせざらしむる事、淸國をして我他意なきを了せしむる事に御指導を煩候他無之べく、之が爲には二個師團以上の兵は週日にして發送すべき實勢を示し置く事、及列國の新軍勢の到着に際して一旅團の增兵若くは尤も創痍ある舊旅團と交代せしむ

る事をせめてはの要用と致候歟に存候。財源に就て地租增徵を無年限とする事の說有之候由、如何にも刀筆策吏の致しそうな事と拜見致候、愈かゝる事に立至るべき氣合の時は、滿天下に現時外交の失計を暴露して政治的外交的敎育を施すに屈强の時機を與ふる者と相成べく候、出兵は朝鮮の人氣を引立候由、可憐なる國民と可申、かゝる愚にもつかぬ出兵は李鈞を始歐米の政客の共に舌を吐きつゝある所、我國の品位を更に數等下落せしめたる次第、當地新聞紙の裏面に顯著に候。獨逸皇帝の演說は、此の國のみならず獨逸自身の新聞にも文明の妨害者と彈劾せられ、社會黨の新聞フォオルエルッの如き、皇帝の演說筆記の各種を列記して、如何にするも皇帝は言責を免れぬ由論じ候。然るに此度キルヘルムスヒョエヘにて、ワルデルゼエの送別の辭中、皇帝は其指命が露帝の申出と懇望とに出でたる旨を三度迄繰返せるに、當佛國の新聞は格別鼻息の荒き樣子も見えず、其の癖七一年の敵將の指揮の下に佛國が戰ふとは、など泣言のみ申し居るといふ果敢なき有樣に候、乍去增稅までいたし遺繰算段いたして僅に仕上たる軍勢を、虎狼の國の爲めに管鑰を啓く犬骨折に使ふ國に比すればまだしもに有之べき歟。

肛穴小、美對外度量論也。

肛鐵砲、喰はせもやらで、肛の穴の、小さき(大臣大將侯爵四郷閣下之語)を聽つゝ、年暮にけり。

南歐日錄

その一

花の都の巴里の西郊散雲里に旅寢して既に一年有半、爲すべきをも成し、觀るべきをも觀果てたれば、辛丑三月廿五日、慣れし郵舍を立ち去りて、巴里に入り、翌二十六日朝十時を以てその中央オルレアン新停車場を發し、南歐探舊の程に上る。

昨夜雪降り、今朝天晴れしも、寒氣復歸して、夏外套にては殆と堪ふ可からず。滊車中ナント行の若夫婦が、二歳許なると生れたるまゝなるとの二兒を携へ、乳母をも伴へる五人の一行と同乘し、宛も家庭の仲間入

せるが如し。午後一時五十分ブロワに着す。ブロワは二萬四千の小都會巴里を距ること南の方四十五里、四百年前の王城の存するを以て著はる、今は町の光景何となく物寂びたり。夕五時半發して、七時二十分トゥウルに着す。巴里を辭して此日行程既に六十里、頭を回らして疇昔を憶へば恍として夢裡に在り。

トゥウルは佛人の誇りて佛蘭西の花園といふ所、今來りて之を訪ふ、頗る其溢なるを見る。此日また大なる雪片降りしきる。二十七日正午トゥウルを發し、車行二十七里、二時にしてマイン河畔のアンジェ市に至る。途上處々ロワアル河の汎濫を看る。岡巒の中腹多く横穴を穿ちて家と爲し、戶牖整然、比々奇觀なり、沿道各地古城の殘存せる、亦これ佛國內地旅行の一奇勝と爲すに足る。アンジェは古のアンジウ侯國の都にして、四百年前佛蘭西王國統一の中心を成せる者、ルチェ王の銅像、古城壘、皆むかしを偲ぶべく、博物館及寺觀、亦觀風覽古に資すべきあり、その市街は近時改築せりといふも、整理甚だ完からず、總して吾が經來たる三市、之を獨逸に比して皆讓る所あるに似たり。

此夕更に西馳二十里にしてナントに着す、市は大さアンジェに倍し、我廣島の匹たり、本來ロワアル河口の入海によりて繁榮せる商港なりしが、近代の大船を容るゝ能はずして、商況古の如くならず。此地古ブルタアニュの域に屬す、五百年前佛蘭西は尙小邦分立の勢に在り、行客の歷遊、乃ち亦これ等舊邦の遺蹤を探る者。

ナントを去るや、半日の行程、ロワアルに離れ、ブルタアニュを出で、ワンデエに入り、シャラントの流域に沿ひ、海岸に近つて又離れ、終にドルドオニュ、ガロンヌ二大江の二大架橋を渡りて、二十八日午後四時、ボルドオに着す、此日行程九十五里、巴里を距ること既に二百里なり。凡そ此あたり、

寒村僻陬の趣蕭條として鷄犬の聲を聞くが如し。村中富豪の邸宅かと近つけば、墻壁の儼然たるもの、皆これ共同墓地なり。

ボルドオは我名古屋に敵し、彼に在りても第四位の大市たり、ジロンドの入江の奥區に位し、大西洋岸に雄視する一商港たり、此地の大學にヂュルケイム教授あり、會見數刻、此行一着の目的を成す。

二十九日夜程を發す。月明滊車丘陵曠原の間を馳せ、時々ガロンヌの川流に沿ひ、東南六十五里、夜十一時を以てトゥルウズに着す。旅亭清潔蓐中湯罐を容る、欵情尤も喜ぶ可し。此地人口十五萬、佛國南西の大都會實にその第六市とす、ガロンヌに沿ひ、都市幾分の新區を有し、宏濶瀟洒頗る從來經る所の諸市に駕する者あり。ナントボルドオ、殊に此地に至りて、庭苑の結構、泉石懸瀑の布置、殆と我邦に在るを訝る、此地の大學ブウグレエ講師あり、逢はず。

三十日午後二時、東馳二十三里、古城を以て世に著はるゝカルカッソンヌに着す、オオドの小流を夾みて、新市古市と相對し、古市は即ち有名なる古城にして、依然として中古時代の面影を存し、羅馬ゴオト時代を閲し來りて、歴史上唯一無二の參考的舊迹たり。城地は一丘の上に在り、城壁高さ數丈、處々に城樓あり、料を拂うて登れば、案内者一々爲に之を說明す。城中の住民亦千六百を數ふ、街路狹窄にして、崎嶇、而も此不便を忍ひて古物を保存する、亦欽す可しとせむか。新市人口二萬八千、市街頗る整然、州廳、中學、師範學、騎兵及歩兵聯隊の所在地たり。

東北四十里、カルカッソンヌを距りてモンペリエに入る、人口七萬五千、佛國第二最舊の大學あり、七百年前の創立に係り、千五百の學生を有す、然も其建築設備の如きこれを我國のに比しては殆と言ふに足らず。ボルドオより以來、矮竹と細柳とを見しが、此地大學植物園には清竿蒼翠、

林叢を成す、珍らし。漸くラングドックの域を出で土人稍、南音の訛を減し、風俗亦少しく優雅を加ふ。三十一日午前十時、此を辭す。

北の方十三里にしてニイム市あり、大さモンペリエと相若く、市街清灑宏濶、風俗亦都雅、會、此日の日曜たりバック祭に際せるを以て、殊に其然るを見る、之を獨逸に求むるに唯ブラウンシワイヒの匹儔あるのみ。市の西北一丘あり、丘上丘下樹木茂り、清流湧き、一大遊園を成す、丘高海拔四十丈、頂上に舊式羅馬塔あり、傳へ云ふ、これ古羅馬の大墳墓なりと、佛國の南部、由來古羅馬の遺蹤を以て鳴る、ニイムは蓋し其尤なる者、此地が羅馬國の一大都會たりし際建造せられたる大演技場アレエヌの遺墟あり、尤も完全に保存せらる、全體楕圓形にして、長徑七十間、短徑五十間、高十二間、石の階段を以て全周を圍み、之を觀客の棧敷とし、中央の圓場、即ち騎士の格鬪演技の場たり、大さ遙に之に若かざるも、而も美術上の價値は則ち大に之に軼くる者を古羅馬の殿堂と爲す、呼ひて方屋といふ、今は小博物館たり、其形象の淡雅高潔なる、其裝飾の趣味に富める、以て古羅馬の宗教思想の調を想見すべく、之を中古以降、耶蘇教趣味の醴の如く、蜜の如き堂塔寺觀に比する、實に娼婦と淑姫との如し、堂長十二間、幅七間、高亦これに叶ふ、眞に曠世の美觀なり。

午後三時、眷々の情を此舊地に遺して東馳時許、ロオヌ河を度り、タラスコンの舊城市に小憩し、一昨々年九月九日、始めて歐陸巡歷の旅程に上れる曾經の道筋を、南來二十五里、六時過くる頃馬耳塞に着す。町の賑ひ、娼婦の横行、大道の狹斜に連る、皆巴里に讓らず、理髮店の亭主も、料亭屋の相客も、皆日露の衝突を噂す。

四月一日、朝來馬耳塞港市を巡視す、海港の設計雄大にして堅緻、地中海岸の隨一に居る、埠頭帆檣の林立する、貨物の輻輳し車馬の絡繹たる

を見ては、坐に往年入港の當日を憶はしむ。港の東コルニシ道といふあり、百仞の絶壁を海水に沿ひ、約一里程、電車を通し、以て遊覽に便す、丘腹は則ち別墅邸宅、點々松林岩牆の間に在り、眼下碧潭澄清、處々海水浴場を設く。既にして左折すれば、大道古樹の並木の間を往くもの、坦々として砥の如く、半里にして再び市街に入る。之をブラド街とす。港頭の第一峯頂一寺觀あり、昇降器ありて登ること百丈、海風颯々、登臨の大觀、房州館山より鏡浦を望むに酷似す、三面丘巒疊嶂、南の一面水天渺茫、想ひ得たり此水直にこれ日本海頭に連るを。寺中納むる所、扁額の如きもの無數、多く海上安全を祈請す、寺稱してノオトルダアム、ド、ラ、ガルドといふ、譯して住吉神社と爲す、可ならむか。此夕復ブラドに遊ぶ、人散し亭靜にして、落寞春夕の情、ものの耳朶に嘔くを聞くあるが如し。

二日朝馬耳塞を出發す、鐵路地中海岸に沿ひ、碧水青山の間、誠に心神の舒暢を覺ゆ。五十里程、正午ニイスに着す、地山を負ひ海に枕み、此國忘寒避暑の地として、また蜜月歡樂の鄉として、豪奢を一鄉に聚む、今春衆議院議長デシャネル君の新婚旅行、亦此地に於いてせり、宜なり亦求婚及舊婚旅行を試むる者の多きや、翩翩たるもの、婆娑たるもの、鴛鴦の如き者、參差として海岸の大道に逍遙す。此邊石灰岩の地質南陽を射て、目亦眩す、小商路傍に青眼鏡を賣る。南國氣候溫暖、春至ること早く、覇王樹、棕櫚、蘇鐵の類、時を得貌に綠なり、橄欖の栽培殊に盛に、地方の特產を成す。邦人岡部一座といふもの輕業の興行あり、一昨夏ブダペストにもその興行あるを聞きたり。

四時ニイスを辭し、海波丘嵐の裏を氣車して四時半モナコに着し、海頭の一旅亭に投し、直に美麗なる大浴場に赴く。此地は人口一萬三千を以て小獨立國を成し、佛國の保護を受く、中學校あり、消防隊八十人、以て

警察及兵備一切の事に任す。國公の居城は半島の臺上に在りまた光景に一美觀を添ふ。海山風光の絶美と氣候の佳良とを利して、全地を一大遊園と爲す。歐州各國の上流人士殆ど此に來遊せざるなし。公許賭博はその特象たり。夜岬頭の巖角に踞して洋上月の昇るを見る。三日午前、更に岬角綠竹翠松の間を徜徉し、十一時出發、八里にして佛以の國境ヴンチミイユに達す。

その二

佛の所謂ヴンチミイユは即ち以太利のヴンチミリア、此處より時刻亦中歐標準時を用ゐ、西歐のより一時を夙うす。停車場にて稅關の手續あり、四月三日午後一時十分瀛車發す。僅に以の國境を入れば、車に傍うて走るの小童、車窓投げ與ふる所の烏目を爭ふ、狀恰も蘇士運河沿岸の蠻民に似たり。國境より東馳四十里、五時半に着す。可き急行車、夕七時十分始めてジェノヴに着す。昔は開龍の生地として知られ、今は地中海岸中歐の貨物呑吐の要港として著はる。人口二十二萬、古風建築の大學あり、カッテドラァレを始め、寺觀の數、佛獨の都會に比して殊に多きが如し。寺內すべて椅子を供せず、羅馬風の建築、覇氣なくして穩雅なり。すべて北以の地、尤も大理石に富むが故に、建築の堅緻にして精美なる者尠からず。私人の邸宅パラッツオバルビを始め、觀る可き者多し。公園ジアルヂノ、ヂヲグロを看る、飛瀑の壯快なる、竹木の猗々たる、全く我庭園の趣なり。溪流に遡りて市の北山に共同墓地あり、名つけてカムポサント(聖域)といふ、全部大理石造の回廊及庭畔より成り、宏潔心目を淨うす。就中回廊は、或は四尺或は七尺、各部域を劃し、死者の像、眷族の悲傷、天使の來迎等大理石若くは銅を以てこれを彫刻し、精美眞に迫り、蒸蒿悽愴、一見人をし

て、惻然たらしむ、其費す所一區にして十萬に上る者ありといふ。聖域の東北隅小丘の上にマッジイニの墓あり、近代以太利建國三傑の一たり。

四日午後一時ジェノヴを出發し、多くは地中海岸山巒の間、隧道多き鐵路四十二里を馳せて、夕五時半ピサに着す、此間以太利第一の軍港スペチアあり、見す。ピサは三萬の小都、大學あり、寺觀の觀るべき者多きを以て其名高し、晩景サンマリア、サンバオロ等二三の寺觀を觀、夜大學生の多く聚まる席亭に以太利聲樂を聽く。

五日花を催す細雨霏々として塵の如し、先づピサの中樞たる寺庭を見物す、ドゥヲモ、カムパニイレ(鐘樓)カムポサント及バッチステエロの四大建築より成る、鐘樓は世にいふピサの斜塔、ドゥヲモは即ち大寺觀なり、圓柱彫刻すべて精巧を極む、其式や全く此地の特有にして、他の模擬竟に能く及ぶなしといふ、カムポサントは即ち共同墓館にして、ジェノヴのとは全く其趣を異にす、足の履む所悉く是れ墳墓なるは彼是相同しきも、結搆は彼が如く偉大ならず、而も此の彼に駕して其名高きは、實に地獄極樂その他の壁畫と、大寺觀中遺存せし者を併せて此に陳列せるとに由る、バッチステエロは洗禮堂にして、外部の裝飾尤も緻密なり。

大凡そ以太利の美術、此二日の所見を以てすれば、精巧緻密を極むると、必すしも鉅大を衒はず必すしも對稱に拘せざるとに於いて、北逸獨美術に比すれば明に我邦の美術に接近すと謂ふべし。ピサ聖域の壁畫、地極の圖に於ける牛頭天王の如き、宛然我佛說を想はしむ、焦熱、血の池、劒の山の如き、ダンテ詠ずる所の偶然ならざるを知る。若し夫れ園池の結構は、明了に東洋的なり、飛瀑、懸泉、築山、岩石、皆これ我邦見る所に同し、銕柵を竹柵にまがへるが如き、殊に面白し。男女顏色漸く赭、わが邦二三の地方に比して、寧ろ雪白の劣れるを覺ゆ。その乞食の多きは、亦宗教の

餘波か、厭ふべく恥つべきなり。氣候は既に攝氏十六度を超ゆ、ピサ大學々生千三百餘、講座六十、曾てフェルリ氏あり、犯罪社會學を創す、社會黨の事に座して職を轉ず。ドゥヲモの懸燭は、實に昔ガリレオをして振子の研究を遂けしめたる者なりと云ふ。

その三

午後五時十五分定刻の瀛車、六時二十分を以て僅に發し、夜十一時四十五分を以て着すべきもの、午前二時二十分漸く着す、ピサより羅馬に至る七十六里、其間突如として車を駐むること僅に一再のみならず、鐵路の不完全、既に三回の説明を得たり。夜深うして春雨霏々、馬車を驅って旅亭を叩き、東方館といふに投宿す。

四月六日朝九時起き出で、十時より觀覽を始む、南國の春光已に十二分、昨雨名殘なく霽れて、天氣此日亦快晴無比、常盤樹は言ふも更なり、多くの木々は既に淡綠の嫩葉を催し、然らざるも亦蕾の膨らめるもの比々皆然り。日下風暖にして外套を着するに堪へず、唯寺觀の内部の如き、清冷の氣人を襲ふを覺ゆ。

此日先つ觀たる所、主なる者は、曰はくサンタマリアマッジョオレ寺、質に此地五山の一たり。曰はくギイドの水畫天井朝曦の圖、ロスピリオシ宮を飾り、色彩の比なき鮮麗を以て天下に著はる。午後は直に古羅馬遺迹の最要點なるフォオルム及コロッセウムに向ふ、途中過る所、トラジャンの宮趾及その圓塔あり。フォオルムロマアヌムは古羅馬のまつりごとの處、即ち祭政堂の遺趾なり、前邊サタルン堂、八基の圓柱地を拔いて生し、これより奥諸〻の遺趾、皆斷礎を留むるのみ、而も世は珍重措かず、今尚發掘整理中に屬す。低回多時、其西より出でゝ乃ちコロッセウ

ムに入る、有名なる演技場にして、東西九十間、南北七十五間、楕圓形の石造建築、ニイムのアレエヌの更に大なる者、憶ふ十五年前始めて英語を講習せる、スキントン萬國史にて讀める所、今や眼前實物に接す、昔は史家ギッボンが此遺趾に來踞して、羅馬當年の盛時を追懷せる、實にその不朽の大著羅馬衰亡史の發端なりといふ、亦偶然にあらずと知らる、春風落日萬里の遊子、此廢墟の巨蹟に登臨し、山巒の透迤たるを望み、春風の嫋々たるに嘯き、俯仰感慨、悵然として千秋の情に堪へざる者あり、

浮ふしを、吾に語らむか、幾代經て、ながれ絶えせぬ、タィバルの水、

四月七日の日曜日は、恰も復活祭の中日に當り、國の認めたる休日として、一切の博物館等皆閉館し、開けるは唯寺觀のみ、限ある日子を以てする觀光の客には尠からぬ打擊なれど、法王寺に詣つるには、得難き日柄なりといふに、朝來宿を立ち出つ、タィバル河畔東北に當りて、先づ奇古なるアンジロ城を看る、傳へ云ふ是れ古帝王の墳墓なりと、乃ち城前の橋によりて河を度り、羅馬法王寺として隱れもなき聖彼得寺觀に至る、宏大にして燦爛たる其建築は、今言ふを須ゐず、折柄の大祭日に該れることとて、參詣の老若男女、幾萬といふ數知らず、而も多くこれ見物的參詣、連にして眞面目なる禮拜者少く、且やこの燦爛、此雜沓、及この囃し立ての中に在りては、心學の達人にあらざる限り、眞面目になり度もなり得難きの有樣を見受けたり、囃し立とは何ぞや、高臺、即ち所謂ゆかの上、老僧音頭を取り、囃し連中(皆坊主)數十人和してうたふ、中に紛れなき女人の聲あり、望遠鏡にて望み見るに、女人の男裝せるものに似たり、一昨年アアヘンの寺にては、稚兒が女聲を發せるを聽きしが、それにも增して奇妙なる事かなと怪みなぞせる間に、旅行案內書付屬の羅馬地圖を遣

失し、肯龜の浮木を失へる心地せり。旅亭の給仕いふ、街頭の遺失品は時ありて歸り來るも、寺院内の者は復るの期なしと、果して然るか、末世なりけり嗚乎。午後乃ち郊外ボルゲェゼに散歩す、春意野に滿つ、咲きしける蒲公英に知られたり。

八日早朝起き出でゝ先つ書林に地圖を求む、幸にして昨失ふ所と同一なるを購ひ得たり。十一時より見物に出つ、旅亭は市の中心といふべき所に在り、羅馬大小四百八十寺、尤も多く此附近に集ふ、就中其最なるをパンテオンとす。滄桑の變、五級の石階今や地に沒して見るを得ず、堂内灌漑、當年宗教の未だ墮落せざりしを看るに足る。其他所見の寺觀尚多々、中にジェシュイット派の寺院あり、亦裝飾の燦爛目を眩す。此地各寺院の、皆頗る繁昌せる、たとひ祭期中に屬すといふも、亦以て以太利國勢不振の一因を知るに足る。觀光の一客評していふ、多くの寺院、少くの學校と、良に以あるを覺ゆ。

午後古羅馬の遺蹤をパラチンが丘に尋ぬ。レギ家の壁畫なほ今尚殘り、其花鳥は宛然椿山若くは和亭の趣あり、唯裸神人畫や則ち大に趣を異にす。丘上就中尤も行客の感懷を惹くは、アウグストス帝宮闕の遺趾なり、或は敗壁の聳立を存し、或は斷礎の頽零を遺す、就中大帝の政事堂玉座の邊、今は蔦蘿の纏綿を見るのみ、俯仰古今、唯水の西流あり、紀念の爲にその蔦蘿の一葉一花を摘採して、遙に家山に寄すと云ふ。

天の下、八隅知るといひし、アウグストの、高御座のあたり、
薑薇摘む、吾は。

古を、吾が訪ひ來れば風を寒み、パラチンの丘の、春暮れむ
とす。

低回逍遙、連峯の蜿蜒を望み、暮雲の漫々を歎し、夕告くる鐘聲に促され

て、六時半僅に此古趾を去る、昔在宏莊又魏義の偉觀、即今零柯敗屋の趣、綿々の恨を春の晩風に寄する、滿目異鄉征人在り。

四月九日はわが始めて東京に入れる日なり、明治二十一年會津峽中の雪を踏みて帝都に遊ひしより、今正に十有三年、其間の遭逢閱歷顧み來りて今日の身邊に及へば、人事身世の得喪、頗る亦思念に値するもの、なくんばあらず、昨來花曇りの空あひうちつゞき、靜坐少しく冷氣を覺ゆ、朝ヴチカン法王殿裏の博物館に赴く、臨時大賓ありて入るを果さず、乃ち轉して古カピトル博物館の新舊二處を歷觀し、カピトル丘上の眺望を貪りて、正午寓舍に歸る、午後更にヴチカンにいたる、見る所その所藏繪畫の一小部のみ、多くは壁畫及天井畫なり、而して三時の刻限閉館を告く、乃ち寺の南方マルゲリイタ道といへる、山腹の森の下道を行く、眺望佳絶、園囿亦よく整ふ、ガリバルヂイの巨像立り。

四月十日朝、開館を遲しとヴチカンに赴き、其繪畫の部を看了る、名畫の驚歎す可き者多きが中に、ラファエル畫伯の最終裁判の圖、哲學宗教詩歌及司直を畫ける一室の如き、尤も用意の尋常ならざるを看るに足る、午後電車馳して、二たびタイバル河に近つき、ピラミッドの麓に於いて(古代の墳墓、いふこれセスチウスのなりと)羅馬城壁を出で、城市を距ること約十餘町にして、パオロ寺に達す、亦羅馬五山の一にして、花崗石の圓柱四列、各列二十を數へ、禮拜堂はこれを以て五劃にわかる、中部幅十八間、左右八間に七間にて、すべて四十七間、奥行六十間、この奥に尙幅五十間奥行十八間の本堂を見る、裝飾簡淨、建築莊嚴、これを羅馬寺觀中わが尤も好める者とす、パオロ寺を出で、東に向うて蕭條たる田舍道をたどり、約一里にして古昔の墓穴カタコムに達す、麥秀既に尺餘に及び、漸々の畝上春風度る、その地底隧道を穿ち、以て墓地と爲す、番僧燭を

照して案内す、往々白骨を見、壁上亦時に古代繪畫を存す、皆今を距ること千八百年乃至千五百年のものとす、更に一里半餘、有名なるアッピアン街道を歩して羅馬城市に歸る。

四月十一日、天下晴の好天氣、朝九時半よりラトラン寺、及その博物館を見、古城壁の欹處遙に白山を望み、マッジョオレ門より入りて歸來す。午後再ひ北郊ボルゲエゼ森林に遊び、その有名なる博物館を見る。獨逸と事かはり、公園めきたる處に麥酒亭なきは、佛以兩國に慽む所なるが、ボルゲエゼ林中極めてさゝやかなる一茶亭を求め得、麥酒なくして僅にベルモットを得たり、而も芳草綠樹の裏、軟風の薫する處、亦以て優遊するに足る。夕五時此を出でてピンチオ丘上公園に遊ぶ、宮内省のにや、服裝などよく整へる樂隊の奏樂あり、木立繁り眺望よろしく、珈琲店さへありて、遊覽の好地なり。

四月十二日、今日は花曇りの空模樣、少しく穩ならぬ姿あり、折〻粒なせる雨落ち來れるも、大事に至らずて止みぬ。午前は市の中心西部なる多くの寺觀、大建築等を見る、これらは殿若くは館とも譯すべき、バラッツォの稱ある建物にて、その風時代物の芝居にて見る所の如し。午後は主とファルネジイ館の天井畫壁畫を見、さてボルラ、パンフィリイに赴く。抑〻羅馬の近郊又市内にてボルラと稱するは、別墅といひたきも、多くは宏大なる屋敷に名高き建築ある處の謂なり、就中昨遊べるボルゲエゼ、及このパムフィリイ等を著名とす、前者は常に公開し、後者は毎週二回とす、大なる森林、ひろ〳〵せる草原あり、薔薇、蒲公英など、春の野遊の趣、今を盛りなり、森の下道、木立の列よく茂れる中を馬車乘り廻す人も多し、唯松の樹を强ひて眞直に仕立て、甲字形につくれるのみ飽かず覺ゆ。夕つくる頃市にかへり、新聞を見るに、我國の故障にもやよりけむ、

露國滿州條約撤回の報あり、さても永久の解釋、最後の解釋ならむや。

十三日、午前は三たび法王宮ヴチカンに至り、その彫刻館を見、圖書館に案内せられ、午下一時に至る、彫刻はさすがに天下第一の稱に副ふ。午後電車西郊のサンアグネス寺に至り、更に漫歩半里許、アニエネ河畔の茅店を叩き、流を隔てゝ聖山(モンスサクレ)を望む、一小丘のみ、昔羅馬の平民、貴族と爭ひしに當り、貴族がその要求を聽かざるや、毎に此に引退して、以て勝利を全うし、權理を伸張せる所たり、曠原の中、彌望一帶、丘山逶迤、青隴大麥秀で、坐に行客をして懷古の情に堪へさらしむ。

七つ野の、青人草を、生し立てし、聖が丘は、若草匂ふ。

四月十四日、國立博物館、美術展覽會、近世美術館を見了り、轉して北郊に近くカラカラ浴殿の殘壘を見る、規模の宏大なる、斷礎僅に處々象眼の豪奢を示せる、羅馬を亡ぼせるもの半ばこれ湯の爲なりしを察する、に足れり、了りて再たびピンチオに遊びバルベルニ宮を一覽し、珈琲ナチオナルにて羅馬大學のラブリオラ教授に會見す、豫め打合せ置きたるなり、偶ライプチヒのハインツェ教授夫妻及令嬢も來合せ、一座となりて談話す、一見舊の如し、別るゝ時懇に再會を契る。

羅馬十日の觀光、眞に百忙の裏に在りけり、十五日、一旦此處を辭してナポリに向ふ。

その四

羅馬より東南六十三里、橄欖繁るカムパニアの野を過りて、午後二時ナポリに入る。以太利第一の大市、人口五十四萬、而も市街多くは不潔、街頭、豕羊の群をなして行くもの數ふ。

夕六時、市西の第一丘、サンマルチン峰塔に上る、寺觀は既に鎖して見

るを得ず、峰はエスウヴの雙峰と相對し、眼下地中海の淼漫を瞰望し、落日晩烟、蒼々の暮色千里より來る、眞に天地の大觀たり。此夜九時以太利第一の稱あるサンカアロ座に赴き、樂劇「フエエドラ」曲を見物す、以太利語、母音の多き、尤も聲樂に適すべしと思ひしに、耳障りの子音、及重子音の爲に、あまり聽きよくは感せられず、矢張佛蘭西語を最佳とするに似たり。且聽衆の喝采の無遠慮なるは東京人に過ぎ、その文句入りなるは彼此よく肖たり。後生をのみ願ふ者は現世を麁略にす、吾以太利人に於いて之を見る。

四月十六日、空よく晴る、朝往復切符を買うて東南七里、エスウヴ噴火山のあなたにポムペイの古市を看る。宿昔正史に小說に讀める所、妖雲當日雙峰の頭より起りて、侈靡淫蕩の安樂鄉、倏忽の間直に焦土に化す、天の災殃を降す、亦偶然と非ざるものか、抑〻エスウヴの墳火は西紀七十九年八月廿四日に在り、當時ポムペイ市民三萬、就中二千餘人は全く遁逃の路を失ひ、丈餘の熱泥の下、全市と共に埋れたるなり。此地博物館、數多の泥灰に包める死尸を有す、中に妊婦のあり、亦以て當日の慘狀を看るに足る。近世に至り、次第に堀鑿の功を成せるも、尙其三分一を露はせるのみ。莊麗なる家屋、泉石、市民商買の狀、歷々指點すべし。エッチ家の如き尤も豪富なる者、その室內裝飾、壁畫の精巧なる、今を距ること千八百餘年前の者として、甚だ驚くべき者なり、當時の畫風、東西甚だ懸隔なかりしこと亦以て想見す可し。市中到る處公用泉あり、人々石槽に手をかけ、呑口に口を當てゝ水を飲みしこと、石槽の緣邊の磨滅して、手の痕迹を留めたるに明了なり、風俗の自由にして放肆なりし狀、想像に難からじ。其他藥舖貸座敷の如き、將た又右の大家の厨房に隣れる密室の如き、眞個に人をして英の小說家リットン伯の「ポムペイの末日」を憶はし

ひる者、驚天動地、底の非常事、慘烈なる天譴の亦、徒爾ならざるを、想ひ得べし、

午後二時ナポリに歸り少憩讀書、六時より海岸を散歩す、晩風濤聲、エスウヴの全姿態を看る、風光亦佳、翌日ナポリの博物館を看了りて、更にタッソの山腹より南海を眺望し、午後三時發車、八時過くる頃羅馬に着す、風俗既に大に優雅なるを覺ゆ、

水城子ナポリに遊ふの日、坊間童子類に新聞號外を鬻く、子太た以太利語を解せず、未だ其何事に係るを辨せざるなり、此夕羅馬に歸り、紐育報知新聞を讀み、始めて其顛末を詳にす、事太だ奇異、而も亦以て社會裏面の一斑を窺ふ可く、而して水城子觀察する所の太た過たざるを證す可し、乃ち其梗概を摘錄し、以て他時の一粲に資すと云ふ、

四月十四日、水城子ナポリに入るの前日、奸僧寡婦及其子を殺す、蓋し所謂痴情の狂せるなり、寡婦名をコロムバ、オルランドといふ、三年前夫を喪うて寡居す、夫蓋し職を警察署長に奉せる者なり、オルランド既に夫を哭す、乃ち數室を賃し、更に諸を人に貸し、以て生計に資す、奸僧名はピエトロ、ボランツァ、數月前來りてオルランドの一室に寓す、婦、姿色あり、寡居年を閲して衰へず、僧乃ち戀々の情あり、自ら抑ふること能はず、日ならずして痴情を婦に訴ふ、婦聽かず、乃ち復これを寺院に誘ひ、綿々として挑む、此の如き者數次、婦其煩に堪へず、乃ち意を決し、其二孤を携へ、將に亞米利加に航せむとす、僧之を聞き、乃ち亦海外旅券を官廳に乞ひ得、將に同船して航せむとすと揚言す、婦頗る危懼、意を決して保護を警官に仰ぐ、四月十四日、僧佛事を寺院に營み、歸る、午後三時婦一孤を其小學校に迎へ、將に家に歸らむとし、僧に寺院の前に逢ふ、僧仍りて復これに說く、婦固く執りて應せず、乃ち短銃を執り、婦を脅迫する者例の如

し、婦、終に、應せず、短、銃、乃ち、發す、耳を、貫いて、眼に、出つ、婦、一、語を、發せず、して、絶命す、孤兒驚いて叫ふ、乃ち復これを射る、心と胸とを貫く、即死す、事ナポリ街頭に在り、行人執へて之を抑ふ、警官至る、乃ち之を未決囚監に送る、鞫問日あり、將に、不日にして、糾明するあらむといふ。

水城子曰はく、耶蘇僧侶の腐敗、一日に非ず、偶〻其實例を見る、收錄する所以、抑ふ以太利の俗、廉恥なく、撙節なく、擧都皆乞丐の徒なり、カムパニアの野、肥沃、豐饒、歐洲第一と、稱す、而して民に、菜色あり、蓋し偶然に非ざるなり、夫れ人力限あり、勞働富を致す、古より然りと、爲す、今乃ち良民の膏血を、絞り、以て、無數、奸惡の、惰民を、養ふ、如何ぞ、其貧にして、弱からざらむや、吾以太利の現狀を、觀、深く宗教の流弊に感あり、記して、以て、俗儒を、戒むと、云爾。

その五

四月十八日、今朝羅馬大學講師代議士辯護士エンリコ、フェルリ氏を訪問す、曾て期を刻せる者、ナポリより歸りて、更に、一日を羅馬に、消せる、全くこれが爲なり、氏は社會學者、殊に犯罪問題の研究を以て、盛名世界に轟く、又社會黨の領袖として盛に民心を鼓吹す、政治上には現政府反對黨の首領たり、年齒四十七八、眼光炯々、容貌魁偉、談論風發の概あり、九時より午時に至る、縷々綿々、予を引き留めて問答談論す、益を得ること多し、談話の以太利の國狀に亘る者を記して、以て南遊紀行の一節に充てむか。

主人曰ふ、以國の大學に特立の社會學講座といふは一もあるなし、僕は三年前までピサの大學に在りて、講せし所犯罪社會學ありしも、特に

講座ありてにあらず、本來刑法を擔任せし餘波なり。然るに、三年前、政府は社會黨に對するクウデタアを斷行し、拖いて大學に於ける社會學社會經濟の研究にも打擊を加へし時、僕も亦罷めて羅馬に來り、今は其講師として、三年續きの講義をなし、第一年には普通社會學、第二年には犯罪社會學、第三年には刑法原理を講せり。

客問ふ、宗教は社會學の大學に發達するを妨くるや。主人曰ふ、否、宗教よりも寧ろ以國の舊國なること大に斯學の發達を妨障す、所謂ミソチイスムにて新を厭ふの風此弊を馴致せるなり。固より宗教も亦社會學を好むに非ず、羅馬法王曾て社會主義を彈劾し、これに關する學科も、亦精神界の疾疫なりといへることあり、然れども宗教は今一般教育界にさほどの勢力なく、隨うて大なる迫害を斯學の發達に加ふる程の力なし。

問ふ、以國に於ける加特力教の勢力は如何、法王の膝下なるが爲に、佛國よりも強きや否や。主人曰ふ、全くこれに反す、以太利統一に大反對せる者は法王なりしが故に、わが中等國民(ブウルジョワジイ)には、宗教は爾來全く勢力と信望とを失せり。下等社會の寺院に行くは、全く唯木戸錢のいらぬ劇場と考へ、音樂、建築、繪畫等、その美術を享樂せむが爲のみ、田舍の百姓ども、寒僻の鄉、全くこの心得にて寺院に出入するに過ぎざるなり。

問ふ、社會黨と寺院との關係如何。主人曰ふ、論理的結果として、社會黨は寺院に反對すること劇甚なり。僕の鄉貫はマントヴなるが、三十萬の住民中、五萬の社會黨員あり、年來僕は未だ曾て一語も僧徒寺院を攻擊せしことなかりしに、五萬の黨員は、皆すべて寺院反對主義なるが如き、その好適例なり。

問ふ、社會主義のたゞ、及下民教育の爲、この國には庶民大學の如き者あるなきか。主人曰ふ、この類澤山に在れども、眞の貧民勞働者は、終日の勞動に疲れ果てゝ、あまり多く之を利用せず、これを利用する者は小ブウウルジョワジイなり。

問ふ、如何にして社會主義は擴布するか。主人曰ふ、學校の如きは明日に此主義をいふ能はず、政府これを敵視すればなり、されど小學教員の半數は此主義なりと見てよかるべし。故に此主義の擴布は、全くプロパガンディストの講演に賴る。過日僕が不在せしも、(此前一たひ期を刻せむとせしに氏の不在のため遂けさりしをいふ)ミラノにて二日續きの講演をなしゝが爲なり。先般僕は半年間に百回以上の講演をなしゝことありかくして此主義の此國に於ける日に益々旺なり。

問ふ、此國に於ける社會主義と政體との關係如何。主人曰ふ、固より全くマルクスの主義に據るが故に、アンテモナルシスト(君主政體反對主義)なり、僕の如きも或る公刊物に於いて明白に此主義を表白せり。先年クウデタアの際、社會黨は國會に於いて十六の議員を有するのみなりしが、今は三十の議員あり、當時此十六議員にて同盟し、此クウデタアに反抗し、出版集會等、あらゆる社會主義の行動に對する政府の妨害を排斥せしが、今は事實上の勝利を得たり。

問ふ、此國學校の倫理は如何に教ふるか。主人曰ふ、庶民學校にては全く市民教育(アンストリュクション シヴィック)の方法を取り、國典及人民權義の大體を授く。近者宗教の反抗あり、學校長が一週一時は宗教の講義を與ふることとなれる者、全國中半數の市あるべし、これも宗教歷史の講演をなすに過ぎず、中等學校にては全く論理に教程なし、歷史其他にて倫理教育を總合的に授くるのみ

問ふ、國民道德の根抵、既に宗教に在らずとせば、何處に其基礎を有するか主人曰ふ、主として家庭に在りて存す。

問ふ、社會主義の主なる敵は、宗教か將た政府か主人曰ふ、政府の政策なり。看よ我國の歲出十七億リラ、(一リラは約我四十錢)就中七億五千萬は國債の利子、四億は陸海軍費、二億五千萬は役人俸給、剩す所三億が僅に生產的に費さるゝに過ぎず、我統一以來、軍事に費す所、實に陸軍八十億、海軍二十億の多きに達し、實に佛墺の二倍に當れり、是れ皆三國同盟の惡果なり。惟ふに我以太利は天與の美國なり、國民の賦性は甚た鋭敏にして理會力に富む、僕曾て白耳義にて社會主義を說けるに、その國民了解の遲鈍なる、我以太利人に比して著しき懸隔あり、次に我國土地の豐饒なる、天下に罕なり、若し政策にして宜を得むには、十年にして歐洲の一等國たるを得べし、是れ我黨が多年軍備過大に反對し、三國同盟に反對し、以太利は宇內すべての國の朋友たるを以て國是と爲すべしと主張する所以なり。三國同盟の爲に、內は軍備の過大を來し、外は佛國と經濟的戰爭(關稅、ことに酒)をなし、以て次第に國力の疲弊を累ぬる、復何等の拙策ぞや。

主人又曰ふ、我國は北中南にて大に人情民俗を異にし、社會狀態を異にす、北部は工業も開け、人民も進み居れり、中部(フィレンツェの邊)は中なり、南部(羅馬以南)は農業さへも幼稚にして、工業は皆無ともいふべく、人民愚にして、犯罪も多し、凡そ以太利を觀察するには、此見解を必要とす。

客曰ふ、今日にて敎法の勢力、佛國に比して以太利は半分といふも、曾ては其勢力の强うして、大なる効果を社會上にも及ぼしゝには非さるか、例へば十九世紀の初には北以太利にては人口の十分一、シシリイの如きは五分一が坊主なりしよし、某書に記せるを讀みたり、その不生產

的生活は經濟的惡果を來し、拖いて一般に精神的風紀的惡果を生し、社會上の萎靡不振を來しゝこと多かりしならむ。主人曰ふ、固より然り、十九世紀の半まで實に斯の如くなりしなり。

主人又曰ふ、君は大に宗教上人心上に注意するか。客曰ふ、然り、我國に於ける目下の最要問題は、國民的精神の充實に在り、十三年前識者時弊を喝破してその必要を唱へたるも、未た其内容を充たすに至らず、乃ち此事は今日以後吾人の責任として存するなり。よりて主人の問に應して日本の宗教關係を歴史的に概説す。主人曰ふ、心理的社會學派は多く經濟を藐視すれども、僕はこれに反して經濟の方が社會現象に重要なりと信ず。客曰ふ、僕は物的心的合一論的立脚地に立ちて社會學説を樹てむと擬す。主人曰ふ、實に佳なり、たゞ心にても感覺知覺推理の中、感覺が先に立つと同樣、社會現象にも經濟が先に立つといふなり。客曰ふ、これ僕の素論に合す「存在」なしに何事もあるなし、唯「存在」が一切ならざるのみ。主人曰ふ、大佳。

此類の談論、主客倦むを忘れ、互に將來を契り、三時にして別る、別に臨みて主人客に贈るに其著述二種を以てす。

その六

四月十八日、午後二時半羅馬を辭し、九時フィレンツェに着す。

十九日、朝、カッテドラアレ寺院を看、その本堂の絶頂に燈る、市街を下瞰すれば、巨屋蟻蛭の如く、行人螻蟻の如し。四邊山嶽周匝、河水縈廻、地勢宛もわが京都に似たり。十時より畫館を見る、高名なるもの多々、殆と應接に遑あらず。午後、史上有名なる此地の貴族主權者メヂシ家の遺蹤をその殿廊及寺廟に訪ふ。四時電車して、西郊カシヲ公園に遊ぶ、長さ約一里、

木立よろしく、平蕪青々、アルノ河畔春意新に、草木の萠動、人心を怡はしむ、南羅馬を距ること八十里、氣候稍、後る、朝夕冷氣著し。

二十日午前諸寺院を觀、更に美術館を見、午後は博物館を見、了りて四時半よりアルノ川の南、丘腹に沿へるコリ通を散歩す、延長里餘、實に百萬金を費せりといふ。

咲花の、フロランスの里は、梓弓、今を春邊と、榮ゆらくよし。

四月二十一日、曉にフィレンツェを發し、以太利の脊梁ともいふべきアペンニン山脈の谿間を渡る、溪流清く山骨出で、風致頗る饒なり。十時ボロニァに着す、ボオ河滙の大原茲に開かる、ブェルリ氏の所謂中以太利を去りて北以太利に入るもの、これより眞の歐洲文明の時勢と駢馳する所とす。ボロニァの市街清潔、その大學は史的重要あり、但し現時觀る可き者甚だ多からず。中暦今日は水城子が誕辰に屬す、今午後一時は即ち我日東の後九時なり、遙に想ふ家苑の歡會を、後園の新蔬亦方に始めて盤に上るあらむか。

羅馬以來瀛車の順よく、定刻に發し定刻に着す、三時十五分ボロニァ發、六時五分ヱチチアに入る、直に先つ其大渠の乘合瀛船に搭して市の大觀を做す。渠幅三四十間、兩岸建築の觀る可きもの多く、北歐の粗大には似もやらず、彫刻鏤飾實に精巧を極め、比例亦太佳なるもの多し。この市や海島に建つ、銕路海を衝いて通す、市の大道即ちこれ溝渠にして、小路巷衢のみ道路を成す、其幅大なるも三間を超えず、通例六尺乃至八尺、往々亦三尺なる者を見る、但し其敷石甚だ佳、他の歐洲市街の如く車馬の往來烟塵を起すことなし。大渠の航程二十餘分時、市の中央サンマルコの廣場に達す、正面にサンマルコ寺あり、右に鐘樓あり、矗立三十丈、古王宮新王宮と稱する建築、場の左右邊を成し、いつれも商店として役立て

り。塲、幅五十間に長八十間、敷石佳麗、建築亦宏壯、夜に入れは素人暗人往來、絡繹織るが如し。

二十二日、朝來有名なる寺院、美術學校、陳列館、殊に舊時の大名館を見物し、瀘船公園に至り、更に瀘船して海邊のリドに至る。抑、エヲチヲア既に大陸を離るゝこと半里程、その外更に半里程、海面一線、防波堤の如く、狹長なる島嶼の連續あり、二箇の通ひ路を以て內海を大海に通す、其一に位するもの即ち此リドたり、洋々たる春海、皆を決して東邊墺の山を見す、正に少壯志士の前途を想はしむる者に似たり。

四月廿三日朝八時四十五分エヲチヲアを發し、後二時半ミラノに着す。西に行程七十里、古ロムバルディの首都にして、人口四十三萬を有し、北アルペンを控へ、南ポオ河を擁し、形勢雄偉、古來爭奪の地點たりしも亦宜なり、此地觀る可きもの、主として大寺院を擧ぐ、屋瓦に至るまで皆大理石、二千の彫像之を飾る、屋上攀ちて登るべし、尖頂高六十間、登臨の偉觀以て加ふるなし、此地の人、以て世界八不思議の一と爲す、亦溢にあらず。ミラノ市街整然、風俗亦南以に異なり、水潔く、風清し。此日先つ美術館を訪ひ、寺を見、寺より下りて公園に遊ぶ、泉石竹木太た佳、蓮鬼木瓜など、今を盛りなり、夜九時更に散步して寺前にいたる、ポクトルエムマヌエル王の御名を名とせるガレリイのあたり、尤も繁華なり、例に仍りて娼婦一二、市頭に點するも、他の數市の如く甚だしきに至らず。明朝曉發、將に歐洲の山地、風光の秀靈を鍾むといふ瑞西に向はむとす。

その七

ミラノの清麗都雅、此を辭する眷々の情なきにあらざるも、尋常旅客の觀る可き者以上を觀了りたれば、四月二十四日朝七時半の瀘車にて

瑞西旅行の程に上る。北馳十二里にしてコモに達す。同名の湖畔、山翠に、水清く、既にアルペンの山峽に入れるなり。此を過ぎ、長き隧道を出つれば、キアッソにして、即ち瑞西の國境第一驛とす。然るも尙人民の常用語は以太利語なり。蓋し瑞西の小を以て、三語分立す。アルペンの分水嶺南以太利に界する所、すべて是れ以太利語なり。以て北の獨、西の佛、兩語に對す。これを此國第一の弱點とす。

九時キアッソを發す。山岳の間空氣殊に清く、數里にしてルガノ湖畔に出づ。湖は例によりて峻嶺巒の間に在り、水色澄徹、遊魚數ふべし。連峯の間雪山の覗くあり、谿間春樹萌動、杏花梨花木瓜の類、今を盛りにて、唯この間一鶯語の閒關を少くを憾むのみ。鐵路湖畔を馳せ、隧道を出入し、湖邊行き盡くる處即ちルガノ村なり。

ルガノより更に數里北馳して達する所をベリンツォオナ驛と爲す。山

あり、水なきも、古城趾、谿水、趣に乏しからず。今カントン、テッシンの首地として、山間の一都會なり。瀘車止まること二時半、市中を散歩し、山亭に中食す。瑞西に入りては、較、鐵道行政の整へるを覺ゆ。ベリンツォオナを發してより、山間鐵路縈迴、屏障の如き、花崗岩の峰頂より、春の日影に融くるアルペンの積雪、到る處無數の懸瀑を成し、絕嶂の下數頃の麥隴、蒼々として、尙肌寒き春風に戰ぐ。斯の如きもの十餘里。午後四時九分、有名なるサンゴタルド大隧道の入口なるアイロロに達す。隧道長三里、海拔約四千尺の高處に位し、實にアルペンの南北分水界の地樞に在り。四時十四分入り、同三十四分出づ。出つる所即ちギョッシェンとす。山峽幽寂の境、農牧の生活、尤も觀察に足る。既にギョッシェンに至れば日常の用語全く獨逸語となり、復南方以太利の勢力を及ぼさず、想ふに百般の社會事象、亦應に此の如き者なるべし。

午後五時二十一分、瀘車ギョッシェンを發し、夕六時半アルトドルフに着す、ミラノより五十五里、絶巓の分水嶺を距ること九里、山嶽四疊、僅に山間方半里の平地に村落を構ふ、有名なる瑞西獨立の魁首ギルヘルムテルが林檎を射たる所として、十年來シルレルの戲曲にて慣知せる所、今カントンウウリの首地たり。アルトドルフを看了りて、更に山懷に迫り入る、杏花、梨花、處々に盛りなり、殘りの雪を度り來れる夕風の肌寒し、途上逢ふ所樵牧晩歸のもの、路を讓りて揖禮す、行くこと二十分にしてビュルグレンを得、テルの生地、其舊館の迹、今に祠廟存す、これに傍うて小旅亭あり、テルの舍といふ、乃ち叩いて此に投ず。アルトドルフの人口二千五百五十三、ビュルグレンは之舍の主婦に問ふ、婦之を良人に問ふ、曰ふ千五百七十三と、兩邑を合して我鄕村横越に匹敵す、以て其僻陬たるを知るべし、唯瑞西の國、由來方百里に滿たず、故を以て其中央を距ること甚だ大なりとせざるのみ。此日過る所、絶巓深谿、夜此山驛に宿し、四日の春月、雪山の巔に懸るを望み、俯しては谿流の轟轕を聞く、眞にこれ渡歐以來の清興たり。

時未だ夏季に入らず、遊客尙稀なり、此夕舍を叩く、音なうてより暫くにして室を整ふ、約半時を要せり、料理悉く成りて、然る後同時數行を供す、西洋にもかゝる處あるかと怪む許なり。主人主婦等皆質朴にして溫良愛すべし。夜もすがら溪水の淙々に心澄む、十三年前上京の旅、津川道中阿賀の水聲に眠りしを憶ふ。

四月二十五日、朝九時半ビュルグレンを發し、三十分程を步行し、途に傍夫と語り、自治の美制を談し、アルトドルフより車行五分、フリュエレンに至り直に乘船、フィエルワルドステッテル湖に浮ぶ、絶巓直に水頭より聳ゆ、或は孤峭勁拔、或は連嶂疊出、水深く山碧に、風光言ふ可からず。舟行十五分、

テル堂に達す、此邊岸下水深百二十間、蒼々の水光、萬古の色を留む、之を
テルが曾て暴風に逢ひ、數、死地に出入せし遺縱と爲す。抑、キルヘルム、テ
ルとは何人ぞや、距今六百年、瑞西尙墺太利の版圖に在り、ハプスブルグ
帝室の代官、暴政太甚、乃ち此に反抗し、志士を率ゐて起てる當年の佐倉
宗吾はこれ此人。シキッツ、ウウリ、ウンテルワルデンの三カントン首とし
て獨立し、今に於いて二十二カントン、聯合以て瑞西共和國を成す、テル
や實に肇國の偉人、而して農民的愛國者の好標本。

テル堂より水程十分、左に絕壁危峭を見る、其上即ちリュトリにして、曾
て三カントンの志士が獨立を謀議せし所と爲す。水程更に十分、而して、
ブルンチンに着す、此日淡靄湖面にかゝり、肌膚清冷、甲板上久しく住ま
る可からず、乃ち此處に上陸し、車行、午後三時チュウリヒに着す。瑞西第一
の大都會、人口十七萬、同名の湖畔に在り、湖の水極めて澄徹、注いて市中

を横斷するリムマトとなる、市中亦清潔無比、亦これ此國自治制の精神
の餘影なるべく、之を以太利中南の諸市に比觀するに、眞に別天地たり。
此日行程二十二里、而して雲山乃ち疊々。

二十六日、十時チウリヒを發し、同名の湖水及チウゲル湖畔に沿うて
馳せ、十五里にしてルッェルンに達す、即ち昨航行せるフィエルワルドスラッ
テル湖の注いでラインとなる所に在り。午後二時、復湖に泛びて一岸グ
レッペンに着し、小丘を度りて他の一岸エッギスに向ふ、山中梨花、杏花、蒲公
英等咲き出で、雞犬の聲僅に聞え、寂寥の境春日殊に遲し。登々一丘に上
る、即ちリギブリックなり、青湖白嶺、收めて双眸の中に在り、湖長さ十里、山
勢縱横、或は右し或は左し、乍ち窄く乍ち濶し、而して其奥水の極まる處
即ちフリュエルンなり、アルトドルフ、ビュルグレン、實に此に接す。今山雪の
皚々を望み、水光の蒼々を瞰し、乃ち疇昔を憶ひ、國風三首を得たり。

菅の根の、長き夏日を、暮れがてに、君をし戀ひむ、と言ひし人はも。

アルペンの高嶺の雪と、ここしへに、とけずも人を、君戀ふらむ乎。

八森の湖、水は通へど、八重が嶺を、隔つる雲の、行がてにして。

六時過ぐる頃、山よりおりて湖のほとりなるエッギスの里に出づ、夕がすみのうすくこめたる湖上に泛ひて、たそがるゝ頃ルツェルンに歸り着く。

二十七日、朝八時ルツェルンを辭す、夜來市中を樂隊の行く音聞ゆ、今朝亦聞く、今此列車に兵隊二百餘乘る、八週間教養の期盈ちて今歸るなりといふ。滊車西馳二時半にして共和國の首府ベルンに着す、スタイン教授を訪ふ、以太利行のあととて逢はず。午後二時十二分直に此を辭し、四時半ロオザンヌに至る、既に佛蘭西語の瑞西なり、五十分船發してジェヂエヴ湖上を渡る、遙に來邊を望み見る所、英の詩伯バイロンによりて有名なるシロンの古城あり。雨後の山態、斷雲飛び、湖光殊に悠大なり。既にして夕陽雲山に映して麗はしく、七時五十分ジェネエヴに着す、船程十五里、ルツェルンより約六十五里を經來たるなり。

ジェネエヴは瑞西の西南隅にして、これを出つれは直に佛蘭西なり、十萬の住民、二百十六の分限あり、市街いと壯麗なり、レマン湖の水これより注いでロオヌ河となる。

二十八日ジェネエヴ大學を訪ふ、日曜にて要領を得ず、十時此を發し、瑞西に辭す

その八

ジェヂエヴより四十二里、大概ロオヌの流域に沿うて西す、而も風光漸く凡、瀛車行程六時、午後三時里昂に達す、蓋し再び西歐標準時に復せるなり。着後未だ旅亭に投するに及ばず、直に織物博物館を一覽す、これ天下唯一の塲、實に各時各國の織物標本を列す、而して明日は閉館日に當るを以てなり。

里昂はロオヌ、ソオヌ兩川の會流に位し、水清く、地に高低あり、家屋整齊、小なれども美なり、人口四十七萬、佛國第二の都會たり。

四月二十九日、午後一時里昂を辭し、夕五時ヂジョンに達す。雨後の新綠郊外林苑の景物、殊に清新を覺ゆ。

三十日午前五時ヂジョンを發す。里昂より五十里、ヂジョンより八十里、巴里にいたる、すべて一昨々年始めて歐陸に上り伯林に向ひし際曾經の地たり。行程千二百餘里、五週日の旅行を了へて、午前十一時半巴里に着す。此行國を經ること四、都邑を觀ること二十有八。

散雲里、相識年少獻暨、將赴于安南、其母倚
門而送淚、獻歌流涕。水城子習之、愴然有作。

ゴオロヲズも、その子送るとて、泣きつるを、
神の御末の、大和人にして。

島王國の五旬

一

巴里滯在十日、その間三たびサンクルウを訪ひ、故舊に辭し、五月十日午前十時サンラザアル停車場を發して英國に向ひ候、途上ルウワンのあたり細雨あり、一時十五分ヂエップにて瀉船に乗り換へ、史上有名なる英吉利海峽を渡る、海波殊に靜穩、唯佛蘭西海岸の山々の漸く淡く消えゆくを望みては、流石にマリアスチュアルト當年の情懷なきに非ず候。

四時五十分ニウヘヴンに着船し、牧郊の間を乗り心地よき瀉車にて、夕七時五分倫敦ヰクトリア停車場に着し、取敢へず北郊マスエル丘な

る知人の寓に入り、翌夕更にハムブステッド、ヒイスにト居致し候。居は大都の西北なる大公園に沿ひ、青丘を控へ綠池に臨み、牛羊の踟躕するを見、嬰孩の嬉戯するを望む、宛如昔讀本にて讀みたる通に候。此處には八週日滯在の積に候。

二

五月十五日より十七日にいたる、三日間ブリチッシミュウゼアムを參觀致候。初日は圖書部及彫刻、羅馬部、中日はバビロン及埃及部幷に亞米利加室。終の日は宗教部、古物部、東亞部、人種部を見る、就中尤も興味を感せるは圖書部の手蹟室に有之、書籍にて知己たるギッボン、マコオレイを始とし、詩人文豪及歴代帝王等知名の士の手蹟、秩序正しく陳列せられ居り候。マコオレイのは例の「グラッドストン、オン、チャルチ、アンド、ステエト」の第一頁の草稿、ギッボンのは例の遭逢、述作、錄の羅馬、感懷、衰亡史編著の發端の頁が開かれ居り候。甲の規律ありて活動せる、乙の摯實重厚なる、筆勢を以てするも尙その人に接するの感有之候。

三

巴里忘年の知交、社會學院長代議士デルペエ氏の紹介を以て、此地實理主義の名士フレデリック、ハリソン氏を訪ひ候。氏年六十九、温和親切の人、トランスヴァル戰爭について日本諸新聞の意見など問はる、夫人は五十有餘、尤も英國社會の弊風、就中、僧侶が正道を嫉惡することを慷慨し、我佛敎徒が支那匪亂について世界の宗敎者に告くる檄文を激賞せられ。東西思想の連通融和は新世紀文明上進の爲に利益あり必要なる事項なりとて、英文にて社會學的の著述を成すことを勸められ候。一孃

年十一二、これも引合せられ、生と夫人と談話の際始終傍に侍坐致候。嬢の肖像二枚まで壁間にかゝる、鐘愛以て想見すべく候。此日晝餐を饗せらる、固より預め案内ありてに候。此國にて觀察訪問等諸般の便宜はすべて此人に賴る事に有之候。五月廿日。

四

昨日本人會の遠足あり、西南十餘里、若草萌ゆるボックスヒルに遊び候。會者七十餘名、公使領事あり、婦人數名あり、小供あり、就中尤も珍敷は西本願寺新法主大谷光瑞師に有之、輕帽銀鞭、シガアを口にし、談笑快濶、當世風の好紳士に候。

此日正午瀛車ボックスヒルに着き、登山嬉遊の後晝食、更に馬車を驅りて近郊に遊び、茶を喫し、夕六時半發車、八時倫敦に歸り候。馬車に隨うて兒女走り來る、亦唯錢を車上の外客に乞ふもの、宛然印度の乞丐兒に同し、是に於いてか文野の別、その差果して幾許なるかを知り難き次第に候。五月廿日夜。

五

日來軍事展覽會、ピカデリイ、キウ公園、ケンシントン博物館、ナショナルガレリイ、博物學陳列館、セントポオル寺、動物園等を歷觀し、昨は國會議事堂に英國民權發達の遺蹤を訪ひ、チャアルス一世が死刑の宣告を受けたる大廣間をも觀、今日はリッチモンドより右王在時の古宮殿及園囿として、世にも名高きハムプトンコウルトに遊び候。道はテエムスの川瀛船に由り、老樹の鬱々たる、芳草の萋ふたる、兩岸邸宅相連るの間、自ら英國生活の趣味を察し得申候。

軍事展覽會は平和的國民なる英人が一たび血を見ては如何に血迷ふに至れるかを表すへく、ビカデリイの夜の賑ひは活動力に基する文明の裏面を示すへく、キウ公園は舊國喬木多きを誇るべく、ケンシントン博物館は社會的科學教育の好標本たるべく、ナショナルガレリイは實利的社會亦美術の忽ならざるを證すべく、博物學陳列館及動物園の整備は遠征的國民の賞牌陳列所と稱すべく、セントポオル寺内部の裝飾の不充實なるに在萬歲月を送るは善男善女が淨財喜捨の時代の既に過ぎ去れるを表明すへく候。五月二十六日。

六

六月二日の日曜、例によりて市中火の消ゑたるの觀あり、午後アルベルトホオルの音樂會を聽聞致候。これは故女王の王配アルベルト親王の紀念として建てたる者の由にて、約三萬人を座せしむべく、入場料も至廉にして、下層人民にも音樂の優美を享樂せしむべき趣意と承り候。これに對してケンシントン公園あり、その一隅にケンシントン宮殿あり、素朴なる建築、而もヰクトリア女王が内親王時代、即位に至るまでの住居にして、生涯眷々の情を寄せし處と申候。女王幼時の玩具もあり、嬰孩より老婆までの女王の肖像も有之候。歸路ハイドパアクを過り、數多の兵娼(といふべきもの有之候由、同遊の倫敦通の物語り候)に逢ひ、夜九時ちかく湖畔の假寓に歸り、夜更に月明に乘してヒイスを散歩いたし候。

七

六月三日、午後ミリタリイトゥルナメントを見物致候。こは武術仕合と

でも可申者にて、一昨日開場、政府の奬勵有之、初日は各國の大使公使等をも招きて盛なる開場式を行ひ候由。色々の興行あり、最後に英兵が翼人和烏合の歡を擬ち拂ふといふ、極めて小供らしき一幕にて、大英國萬歳王陛下萬歳の曲を以て打出しと相成候。これらは誠に國民良心の麻痺の好適例と申すべく候。一昨日例のハリソン氏を訪問致し候節、氏も語らるゝ樣「近時帝國主義の政策より來る社會の趨勢は洵に歎すべき者なり、此十五年來は、實に吾等をしてペシミストたらしむる者多し、我英國の信用の下落の如きは、著しき現象にして、實に此度の戰爭にて百十四磅より九十三磅に下落せるが、識者は皆これより英國は決して從前の如き信用を回復せざるべしといひあへり」。生問うて曰はく、此過失は更に近時亦米國によりて犯されつゝあるにあらずや、氏曰ふ「米國の過失は我英國に比すれは遙に小なり、現時米國の信用は英國よりも高し、此の如きは有史以來空前の現象なり」との言に候。一葉或は天下の秋を知る者に非ざるなきか。頗る注目を要する事象と存じ候。

八

今日は午後三時過有名なるエエストミンスタル寺院を見物致候。ダルキン、マコオレイ、チスレイリ、バアマルストン、その他科學者詩伯政事家等、人間社會の歷史の作り手が時を異にし處を同じうして此處に永眠しつゝありと思へば、個人の天職の至大至高なるも身に染みて覺えず衣衿の肅然たるを感じ申候。一生を悲劇とせる艶麗花の如きマリアスチュワルトも、驕慢妬悍にして而も有爲の機才に富めるエリザベスも、文豪アルヰング、の案内通り此一堂の裏に永久の安居を求め居り候、折柄寺院は神事中にて人々いと靜肅なりしが、事果てゝ後は閑寂の

境更に一層の崇高を感すべしと思ひきや、青坊主連にや、オルガンを弄して、囂感甚だしく、こも末世の常かと情なき感じも起りつ、五時すぐる、こゝ夕陽の猶高きに寺門を出で、申候、六月四日火曜日。

九

昨日は西北三十里、オクスフォルドに遊び、ハリソン氏の紹介せる教授ホランド氏を訪ふ、教授夫人及令嬢、後園の樹下に茶を設けて饗待あり、小鳥卓上に來飛し、清談の興を助け候。夜九時キンゾルに來り泊す、倫敦を距ること十里、王宮の所在地、夜、靜、始めて客懷を覺ぬ候。

今朝餐後、この地の一區エトンの中學を參觀す、創立以來四百六十年、賢相勇將多く此校より出づ、是等が幼時の紀念、小刀にて柱などに彫りつけたる姓名の如き、尤も見る可き者に候、例へば詩人にはシェレイあり、政治家軍人にはグラッドストン、ゾオリスベリイ、ピット、フォックス、エルリントン等は、皆此校の出に候、寄宿舍の模樣も探索を遂げ候。

午餐後キンゾル王宮の宮苑を觀る、此日王陛下外出なかりしを以て宮中拜觀を得さりしも、中古城壁の折衷風の建築は、場所柄と相應して壯觀に有之候、かくて夕四時半氣車、半時倫敦に着し、六時歸舍いたし候。

六月十五日夜、

十

今日午後、テエムス河の下流バルフリイトに繫れる帆船コオルンヲオル號を參觀いたし候、これは不良少年を感化して良民と爲し、就中海員としての生涯を開始せしむる所に有之、開始以來今に二十年、三千人の改悛立身を見たりと申候。凡そ此國の感化事業は、主として規律、清潔、

及勞働を以て性格の枉れるを矯むるの方針歟と見受けられ、誠に教育の肯綮に中り候義と至極同意に候。校長は後備海軍大佐アルサル、モレルといふ老人にて、四十五年前日英最初の條約に調印せりなど語り候。一昨年夫人を喪ひ候が、その以前より常に此老船を以て家と致し居り候由、感すべき事どもに候。六月十九日。

十一

前週は不良少年を教誨する學校を見物するに忙はしく、夜分は幸路程遠からぬカムデン座に、ベンソン夫婦一座の沙翁劇の興行あるを利して毎夜見物、日によりては晝興行を見物し、一旦宿にかへりて晩餐し、更に夜興行見物に出掛け候。物理學校の通學より、霜を履みて早稲田の僑居に歸り、毎夜一篇つゝラムの筋書にて讀みしより十四年、此頃の觀劇は、面白くもあり懐舊の情にも有之候。

今夜はヘンリイアルヰング優の「キングチャアルス一世」曲をライセアム座に見物いたし候。ハムブトンコウルトの麗はしき宮居に始まり、斷頭、登臺の前夜王后王子訣別の塲にいたる、凡そ四齣、クロムエルが王と論判の末「チャアルス、スチュワルト！」と大喝せるに喝采せる觀客も、此訣別の幕には流石に鼻うちかむ音のみ聞え候。六月二十五日火曜夜。

十二

明日を以て將に英國を去りて再び歐州大陸に向はむとす、一日の閑を利し、知交四人にて、佛國對岸所謂「白銀の海」の濱なる海水浴塲ブライトンに遊び候。此地倫敦を距ること十八里、地濶く海大に、奇山秀峯の壯麗なしと雖も疊石棧橋、人工の大と雄とを竭し、人をして堂に英人の氣

性を想はしむ。夜海樓酒を酌み、濤聲耳を洗ふ、乃ち此片葉を呈し候、六月三十日夜九時。

マロニエの、花咲く見れば、白銀の、
海の彼方の、人ししぬばゆ。

英國教育の得失

謹啓、初夏の候、筆硯益〻御多祥、奉欣賀候、然者、近時我本國にて教育に關する理想的詮議の聲追〻高く相成、佛のドモランの「英人の優勝は那邊に存するか」と申す論述が、殊の外流行致し候而已ならず、英人の氣風、公德の養成などの議論も、中〻八釜敷相成候由、教育界、覺醒の機運は、さる事ながら、例の何かといへば直に先進國とかの實例を求め、直にこれに猴似するを以て改革進歩の能事了れりとする輕薄浮躁なる我現代の國民性、未だ容易に改悛の兆を見ざる儀と、遙地歎息の外、無之候。佛國の時弊も多々有之、隨分社會の致命症たる症候も無之にはあらず候へども、英國の學風とて強ち悉く取りて以てこれが藥餌と爲すべき程の

者而已にも無之、彼國にては、ドモランの著述よりも、政治學校長ブウトミイ氏の「英國民の政治的心理」の如き、寧ろ識者の參考と相成居り候。ドモランは一慷慨家、到底經世家の氣略なく、之に對して御承知のアハトオ氏、近々佛人の爲に氣を吐くよし取り沙汰も有之候。

此國に參り候ては、萬事フレデリック、バリソン氏の厄介に相成、折角のバルカン行をも犧牲にして參り候事故、先つ以て敎育視察に主力を集中致候。去月廿八日にはハリソン氏の紹介を以てケムブリッヂに赴き、一わたり實地の見分も致し、該地留學の田島今村兩氏の好意によりて、寄宿寮の生活をも一覽致し候。マコオレイ、ミルトン、テニソン等、歷史の英豪が住ひし寮室、運動場の整美、倶樂部の整頓、食堂の設備及規則等、聞きしに違はず、唯小修正の必要とも申すべきは、右食堂の晩餐には、寮生必すしも毎日列班するに及はず、毎週三回は之を欠くを妨けずとの自由

有之儀に御座候。此月十四日にはオクスフォルドへ參り候、これも大同小異に有之、その翌日はエトンの中學を參觀致し候。これは例の東方策士などによりて我國にも喧傳せる所謂學鄕の地に有之候へども、これもその所傳に少しく修正を加ふるの必要有之候、そは學生寄宿の制度にて、これは何も敎授の家に十人二十人が預かられ居るには無之、別に二三十人を容るべき個々獨立せる小寄宿寮數個あり、是等は各寮長ありて、皆獨身の若人に有之、舍監の職を取り、併せて豫習復習の監督及手傳を爲す、此若人婚姻するときは職を去る、これ在寮監督を不便とすればなり、されば敎授及夫人は學生等と寢食を共にすといふが如きは、畢竟東方策士の理想に過ぎざりし儀と御承知可被下候。其他校內禮拜堂の設けある事、此校の生徒たりし偉人豪傑が梯段壁板等にその名を彫りつけたる事が此校の誇りなる事等は、聞きしに違はぬ次第に御座候。

扨かゝる中學、かゝる大學の教育が、各〻其目的を達しつゝあるは事實に候。即ち獨佛の大學等が、或は偏する如く、學術技藝の學習及研究所たるよりも、寧ろ一定の理想的型式に陶冶して人格の養成品性の陶冶を成す事、これに向うて是等英國の模範學校が、着々効を奏しつゝあるは事實に候。さりながら此事實は抑〻吾人日本の教育の爲に焦慮する者共に向うて果して幾許の教訓を與ふるか、これを模倣し此まゝの者を日本に起し成せといふに在らぬは斷々乎として確言すべき儀に御座候。

第一に是等模範學校の短所は、一般英國の教育機關として、餘りに貴族的なる餘りに不經濟なる事に有之候。中學生の費す所通例年額二千圓、大學生の費す所通例四千圓乃至六千圓といふに至りては、實に我〻貧乏國の貧乏書生が膽を潰す所なる而已ならず、富裕天下に冠たりといふ英國社會も、その一般人民に取りては實に眼の玉を飛び出し候鉅費に有之候。されば、エトン、ハアロウの如き中學、ケムブリッヂ、オクスフォルドの如き大學は、結構は誠に結構に相違なかるべきも、到底英愛聯合王國の各中大學をしてすら悉く此に倣はしめ能はざる次第、今日の實際が之を確證いたし候。然るに今直に之を我中大學に移し試みむとする、華族學校の學習院あたりが其百分一を模擬せむとするならばまだしも、一般制度に此を擬せむとするに至りては、迚も正氣の沙汰には可無之候。

第二に是等模範學校の模範たるの實なき短所は、その歴史的發達の產物たるの點に有之候。抑、是等の學校が特殊の魔力を以て品性教育の實効を擧け候所以は、其設備の完全にあらず、その教師の優勝にもあらず、全く英人理想的人格の三十三間堂たるに存し、即ち此校に於けるや、

一卓一几の微も、一室一廊の小も、悉く歴史的意味を有し、或はバアマストンのナイフの痕を印し、或はテニソンの墨痕を留むる等、到底他が摹せむと欲して摸する能はさる所たり、乃ち是等學校の價値は、古書畫骨董品のそれの如く、一あるべくして二あるべからず、以て茶人の愛玩に供すべくして、以て一般の享用に資す可からざる者、これ亦英國その者が第三第四のケムブリッヂ、オクスフォルド、第三第四のエトン、ハアロウを有する能はざる所以。七百年の大學、四百六十年の中學は、新造我社會の如きに於いて之を求むる、浦島子と雖もこれを難んずべく、誠に癡呆の沙汰としか受取れざる次第に候。

第三に是等摸範的學校の教育の理想、所謂學風も亦隨分短所を含有致居り候儀に有之候。英人人格品性の理想は所謂ジエントルマンに在り、ジエントルマンの一語、直に諸般の願はしき德操を具備する理想的人格を意味し表示するは、今も昔も變らざる所なるも、その所謂理想的人格の内容に至りては、教育の學風に密關して、暗々冥々の裏、徐々漸々稍々として變遷しつゝあるを注目せざる可からざる次第に候。エトン、ハアロウの如き中學を經、たとへば十一二の腕白盛りにして既にシルクハットを冠り、それより進みてケムブリッヂ、オクスフォルドの如き大學に入り、何不自由なき生活に、何の苦もなき學窓を經て人と成れる性格は、聊かの曲りくねりなき、のッぺりしたる性格たるは必定にて、癖といふ癖はなきも、隨分意氣地の乏しき人形的性格と謂はざる可からず、今の英國は、幸に上流紳士悉く是等の教育より來たるといふ實狀ならざるが故に、其弊はさまで大ならざるも、これを以て完全無比なる教育の理想とするは、之を天下泰平の時に施す可きも、斷して之を國步艱難の時に用ゐる可きに非さるべく候。英國社會の風氣、之を大陸諸國に

比して、一般に鷹揚にして局促せざるは殊に吾〻外邦の遊客に適するも、國運が幾分か靜止的保守的にして、進取的活動的にあらずなりつゝある所以、亦此邊より胚胎せずとも言ひ難かるべく候。此月三日に倫敦北區の某街に政府の奬勵にて開設せられたる陸軍演武會の如き、眞に是れ兒戲に等しく、富强宇内を壓する英國民の晴れの技と申すに足らざる而已ならず、陸上運動を以て世界に名高き英國人の興行とも名つけ難きばかりに有之候。然るに此たわいもなき兒戲を觀て狂喜喝采し、このたわいもなき兒戲ならでは志氣の興奮が出來ぬといふまで殿樣風となれる英國紳士社會は、今や飛鳥井少將をでも備ひ來りて蹴鞠の稽古でも相始め候事なるべく、況んや最後に烏合の蠻人を大英國の軍隊が打ち拂ひ追ひ散らす一段を以て大切りとせるに歡喜するが如き、弱を侮らず强を怖れざるナイトの氣風などは藥にしたくも影だに認め難き次第、その弱輩さ加減は實に想像の外に候。一葉落ちて天下の秋を知る、英國の社會は今やその教育の理想即ち學風其者に向うて猛省し、緊褌一番以てグラッキイ兄弟の出つるを豫防すべき時代にはあらざるかと、遠來の遊子中〻心配に堪へぬ次第に有之候。

かゝる短所も我國の輕薄者流や佛のドモランの如き慷慨家が天國の如く想像する英國の教育には有之候。固より長所は長所として多々有之候へども、そは世俗が餘りに言ひ囃し候事故、こゝには重ねて擧げ說く必要無之候。我國の如き、二十世紀劈頭の世運の如き、到底かゝる櫻かさして今日も暮らす流義の教育を摸擬踏襲するに堪へぬ事は、苟くも常識ある者の直に認むる所に可有之候。

一日是等の胸臆を以て例のハリソン氏を訪問いたし、英國教育談を試み候處、氏曰ふ、英國教育の二大要義は、一に自治なり非干涉なり、文部

省といふものなし、二に貴族的なり、これ皆社會の狀態に由るものにして、佛獨に英の流義を移すべきに非す、英に佛獨のを移すべきに非す、且貴族的なるより、一般下民の教育は大に後れたり、ポピュラア教育について、三十年來多少の施設を成せるも、貴族及保守黨は、却りて之を害とし、十五年來諸般の改革と同樣、中絶沮廢の有樣なり、拙者は四人の息子を諸方の學校に送れるも、一として思はしからず、エトン、ハアロウは純然たる貴族的設備なり、三十年來教育を宗教家の手より奪ふ所の、所謂リベラリゼエション、一名ナショナリゼエションの事行ひ始められしも、近時アリストクラシイの反動によりて、再ひ坊主の手に入るゝ趨向あり、是非なし」と申され候、亦以て小生の所見が尋常浮誇の臆斷に非さるを御見認可被成候。

普通小學教育も、ハリソン氏の門下ともいふべき、視學官マルヂン氏の巡回に案内せられ、倫敦東郊の大町ウェエストハムにて探驗いたし候、男子及女子小學校、幼稚園、割烹學校、手工學校、聾啞學校等數個を參觀せるも、別に奇とすべきことなく、唯すべてが實際的なるを取り柄といたし候樣感し候、生徒の身なりなど至極質素に候、唯地理の教課中、十二三才の一生徒が教師の問に答へて、日本は輓近ロシアを滅せりといひしは、少々赤面の至りに有之候、マリイランド、ポイント、スクウルといふ一女子小學校にて、その附屬割烹學校の料理の中食を饗せられ候、

昔世の中に漢法醫と申す者あり、草根木皮、天然が與ふるまゝの物を取り來り、人參は何に宜しとか、大王は何にきくとか申して珍重がり候、これも皆無には優り候へども、分析調合の術を知らさりし昔の事とて是非もなき次第、今より見れば憫笑の至りに候、然るに今日我本國思想界の有樣は、猶未だ此漢法醫時代を擺脫せさる樣子、二十世紀東洋の先

進國、さりとは情なき次第に有之候。殊に此類が所謂文明開化を標榜する連中に多々有之候は、愈〻以て珍とするに足り申候。板垣翁の佛國革命流の自由主義、福澤翁のベンタム流功利主義の時代は、淺田宗伯先生と門戸を併べて其美を競ふ者として論外に置くも、兎角分析調合の藥方を嫌ひて、そんじよそこらの產物たる柘榴根皮、イボタの虫などを貴ひ來りて、萬病即効劑と振りまはす、餘り見事とも申さる間敷候。近來個人主義とか、社會主義とか、ドモランとか、アングロサクソンとか、愛の敎とか、イエホヴとか申して、唯そのまゝに頓服すれば、百病立ところに平癒すと功能述べ立て候は、丸で思想界の賣藥に外ならず、思想界の醫學、社會上の醫學の不振此の如く、その將來の働き塲此の如く廣大なりとは誠に驚き入ッたる次第に候。すべて是等の病源は、依賴心のみうち高じて、獨立自尊の心極めて薄弱に、自個の經營は自個任ずるの大勇猛無之の致す所、他力信心が獨り宗敎上のみならず、亦社會及個人の修養上にまで及びたる浸潤の餘勢に外ならざるべく、かゝる社會の常として、誰か西洋にでも遊び候節は、必ず何か右樣奇應丸實母散的御土產を齎らす者と考へ、西遊の當人も、亦是等の御土產を持ち行かねばならぬ者と考ふるに立ち至り、偶〻かゝる御土產呼はりの賣藥騷ぎを、御膝で御茶を沸かし候連中も、ケレオソオトを丸藥に仕立候、故智を襲ひて、自分の鼻糞をば「英國では」とか「獨逸學者の說に」などの立派なる藥袋紙に包みて勿体らしく販賣いたし候次第に候。かゝる輕浮にして茶番極まる社會にては、迎もジニュインなる落ち付きたる、即ち摯實重厚なる敎育の理想、淸新靈活なる社會改進の氣運などは致し難き者歟と存候。

英國敎育の長短に關し、右までであら〳〵申上候。右の言語に破天荒過るもの有之候はば、そは小生が奇を好み異を立つるにあらず、世間がか

ばかりの事を未だ道破せざりしの過に候、不日此國を辭して露國漫遊の途に上り申候、匆々不一。

虛實見、爲殖民政策辯也。

殖民地の、騷になやむ、大英の、

虛實も見えて、年暮にけり。

再び大陸に遊ぶ

（上）

專攻の學問よりするも、新興社會の觀察よりするも、歸途を北米合衆國に取るの必要あり、英國の滯留、當局の協賛を待つもの五旬、終に到らず、乃ち意ふ、露國の漫遊より直に歸途を西比利亞に取り、途に朝鮮を經由せば、印度洋上平凡の航路を二たびするに勝らむかと。是に於いて行李を輕減し、七月一日夕八時四十分、倫敦リヴプウル停車場を辭し、去りて再ひ歐州の大陸に向ふ。

十時十分瀛車ハルキッチに着す、直に停車場構内を横きりて船に乘り、

二十五分船發す。時に陰暦六月望夜に屬し、月明金波を碎いて清爽言ふ可からず。既にして船北海に出づ、夜色漸く闌け、海風冷々、甲板上久しく住まる可からず、乃ち室に入りて一睡す。

七月二日朝六時覺む、船は既にシェルドに入りつゝあり、十時船アンヱルスに着す、直に諸勝を探る、街上端なく下田學士に逢ひ、共に倶にす。五時半此を發してブリュクセルに向ふ、夕七時、細雨白耳義の國都に入る。

三日朝私立新大學を訪ふ、蓋し此地大學と稱する者凡そ二、皆私立たり、無政府黨員にして方今地理學者の泰斗たるエリゼエ、レクリュウ氏を聘用するの可否に關し、意見合はざるを以て、社會學者ド、グレエフ氏が同志と計りて別に一大學を創立せる、之を新大學と爲す。レクリュウ氏は其弟文學者エリイ、レクリュウ氏と共に此大學の講師たり。大學今は夏休中に屬し、設備亦見るを得ず。轉して博物館その他の觀覽を成し、午後三時、瀛車して南郊五里にヲオトルロウの古戰場を訪ふ、今を距ること八十六年、一八一五年六月十八日の戰爭、實に那玻崙第一世最終運命の決定せる處とす。廣濶なる地勢、小丘濤の如く起伏せる處、蒸々たる夏風大麥を度り、千古英雄を憑吊す。原上建つる所紀念塚、高二十丈、登臨顧望すれは當年馳驅籌略の場、歴々として指掌すべし。夕六時歸來す。

四日、ド、グレエフ氏をジェットサンピエエルの僑居に訪ひて閑談す。午後メイゾンドブウブルを參觀す、實に二萬四千の勞動者の組合なり、設備完全無比と稱すべし。ド、グレエフ氏の紹介にて、レクリュウ氏を訪ひしも他行中とて逢ふを得ず、轉してボワドラカムブル公園に遊ぶ、すべて此地從來小巴里の稱、虛しからざるを覺ゆ。

五日朝八時白耳義を辭して和蘭に向ふ。一たび蘭の地域に入れば、佛語は全く通せず、はさ木に似たる並樹、水鄕蘆萩、大野の光景、宛として我、

北越の野を憶はしむ。十一時海牙に着す、直に美術館を探り、午後村上學士の案内と説明とを以てフィステンボッス離宮を見る、實に一昨初夏萬國徹兵會議の場たり。夕北郊海濱スケヴニンゲンに三浦學士を訪ひ、此國海水浴場の風流を觀る。

六日朝九時海牙を辭し、車行一時にしてアムステルダムに着す、水郷の大都、我新潟に似て大且整ふ、美人、マラリアに至るまで相匹似するは一奇といふべし、名もダム(潟)といふは相稱へり。博物館、公共福祉協會、港灣、猶太街等を觀覽の主なるものとす。猶太街の特色は、不潔、子供の多く遊へる、眼病及眼の不具の多き、旅人を物珍らしみて狐疑する氣風、等すべて大和四十八夙、若くは穢多村の所見に應ず。

此夕七時半發して獨逸エッセンに向ふ、一昨秋此國を辭してより實に二十一ヶ月を閲せり。七日は日曜にてクルップ鐵工場を見るを得ず、乃ち西十里、クレフェルドに如空子を訪ひ、共にデュッセルドルフに遊ぶ、八日朝來クルップ工場を訪ひ、副事務長フォン、ビュロウ氏(首相の弟)に逢ひ、ドクトルエンゲルス氏案内し、特に馬車を驅りて終日工場及勞動者居住地の諸設備を巡視す、抑、此鋏工場、當代クルップ氏の父フリイドリヒ、クルップ氏が、僅に五間四方にも滿たざる、蕞爾たる住宅兼工場より業を起して、今は約三萬の職工を使役せる、世界第一の大鐵工場を化成せる者、その勞動者待遇の設備は、宇内尤も完備せる者として稱せらる。

夜十一時半エッセンを辭し、九日朝伯林に着し、直に例のグロオト氏の宅に入る、皆久情を叙して相欵語す、近傍の紙店の媼、床屋の若者、皆よく舊相識たり。

此夕わが米國經由に關して、當局協賛の報至る。乃ち西比利亞旅行の計畫は當然消滅に歸し、露國漫遊より歸り、此國ブレエメンより米國に

向ふに決し、十一日夙くロイド會社に瀛船券を買ひ、來月十三日を以て發程に決す。

伯林滯在十日、或は舊知の來往饗待、或は郊外曾遊の再訪、日々の清興に盛夏の炎暑も忘られつ、十九日夕七時、伯林動物園停車場を發して北征の途に上る。

（中）

伯林の東ミュッゲルゼエに至るまでは、曾て赤城子と遊覽を經たるも、東部普魯西は全く未知に屬す。同一王國に屬すれども、人煙の疎なる、風物の蕭寂たる、西部及南部、ライン若くはザクゼンに接する地方とは全く趣を異にす。

凡そ露國に旅行する者は、普通旅券の外、別に本邦公使の紹介を以て、發程地駐在露國領事の證明を要す、これ歐米諸國間の旅行の曾て見さる所にして、亦實に露國特色の一たり。七月二十日午前一時半、瀛車獨露の國境アレキサンドロヲに着するや、驛長、稅關吏、直に此旅券一切を取り去り、行李を檢査し、以て書籍記錄の類に至る、尤も眞密嚴重を極む。旅券は發車に先たちて旅客に還すを例とするが、午前三時半の發車に及ひても、水城子は則ち遂にその還附を得す。午前八時ワルサワに着する、や、直に佛獨語兩樣の要求書をアレキサンドロヲ驛長に發せり、其後モスクワに彼得堡に、數次要求せるも、竟に復歸を得す。

國境より乘換へたる瀛車中、露國の二婦人同室す、一室四人、牀は上下二段あり、水城子が牀の番號は、偶下牀に當れるを以て、一婦人之を求めて甚た五月蠅し、蓋し各人一牀を占むる、必す別に席札を買ふを要す、而して婦人の求むる所は乃ち交換に在らすして讓與に在り、露人の心術

果して此の如きか、これを入露第一の所感とす。

ワルサワは舊波蘭の首都、人口七十二萬、中三分一は猶太人なり、露國第三の大都にして、實に伯林の東百五十里程に在り。獨人の經營せる旅館に投せるを以て、旅券なきも幸に不便なきを得たり。此地の用語は波蘭語露語と相雜る、外國語にては獨語尤もよく通ず。希臘教の寺院は、頗る多々あれども、建築は莊麗ならず、例の球葱形、擬寶珠形の屋根、或は金色、或は紺青、璨爛として人目を眩せしむる、趣味の劣等なるを下すべし。參詣の老若男女、叩頭膝行、皆耶蘇尊像の足指を接吻す、傳染病の媒介は絶好の機關たるべし。朝暮日中を問はず、參拜甚だ多し。僧の讀經の調、殊に可笑し。

寺院についで觀る可きは宮殿たり、古王宮及ラジエンスキイの二あり、古王宮は今現に總督の館なり、その威權も想ひ見るべく、歐羅巴を出で、亞細亞に入れる思は此邊にも胚胎しつゝあり。ラジエンスキイは瀟灑たる小離宮、園池雜然、夏時の涼風唯掬すべしとするのみ。

大學は館舍汚穢、夏草蔓れり、中學は秩序整然、莊麗なる佛殿ありて、校内の禮拜堂たり、この國柄として當然なれども、他邦人、西歐文明人の眼には極めて奇怪なるべし。

市街未だ電鐵なし、悉く馬鐵なり。公園は予が旅館の前なるサクソン公園木立茂れり、夕よりは娼婦の徘徊も少からず。晩餐後ワイクゼル河邊を散歩し、橋を渡りて對岸ブラガのアレキサンドル公園まで行く、すべて整はず。

七月廿一日、午前九時半瀛車發し、露西亞の中心たる舊都モスクワに向ふ、實に三百四十里の長程なり。北地の天色、盛夏と雖も恰もわが殘暑に該り、日中は暑く、朝夕は涼し。瀛車は例の四人一室、各人一牀なるが、速

度の大ならざるに拘らず、烟塵を捲くの多き、眞に閉口掩耳の態なり。

午後二時プレストに着し、三十分停車す、これまでを舊波蘭とし、これよりを眞の露西亞とす。此地の停車場、宏大にして軍事的設備盛なり、その荷物扱所の一隅に佛像を安置せる禮拜處あり、軍人、擔夫の如き、往來必ず禮拜す。

瀛車漸く露の中心に進むに隨ひ、原野益〻荒寥、松柏科の森林多く、村落の如き、數里にして僅に一二を見るに過ぎず、到る處の遙望、唯寺塔と金碧と兵舍の白堊とを看るのみ。

七月二十二日、午後二時四十分モスクワに着す、假停車場なり。此地は露の舊部、實に國主發祥の地たり、人口百萬、今は西比利亞鐵道の起點にして、實にわが西遊中、尤も東方に位する地とす。街衢より民人生活の狀態に至る、之をワルサワに比ぶれば、粗野異樣に感せしワルサワの尙大に、歐洲的なりしを悟れり。此處にも亦獨人經營の旅館に投ず、旅券なきが爲に警察の手續を了する、若干の手數料を徵せられたり。

着車より旅館に至る、先つ目に着けるは被髮左衽の馭者なり、淺黃木綿の八寸袖を左り前に合せ、桃色木綿の三尺を腰に卷き、鞭を執りて馬を叱する、宛然碩北の羯兒を憶はしむ。これら皆回教徒にして蒙古人なりと鐵道馬車上の人語れり。道路も小石の圓石を敷きたれば、馬車のゆれること甚たし。行人、婦女はやゝ巴里形なれども、何となく整はず、田舍芝居の女形に似たり。街頭の所見、人の不潔にして異臭ある、町の寺、家、及その他の建物の色どりの濃くして不調和なる、寺院の下濶く上窄きつくりなる、そが內部の九十九回して、暗く狹く迷室に似たる、家屋は大概二階にて、三階なるが少き、市の中央より少し進めば、皆前市の觀ありて、家立の罕なる、町家の看板まで、金地にして佛畫めきたるが多きなど、